



江戸名所圖會

十三

ル 4  
3605  
13





小石川

水道橋より外白山のあたり迄の惣名なり昔

赤坂社蔵

細流數條をぐれり故にかく号するとも

江名勝志と云ふに云名所ありとありと據るなり必なり又

此地は加州石川郡の白山の神祠鎮坐の故ありんと云傳ふ事とも詳

なり元和元年の勸請あり永祿二年小田原北条家の所領役帳に

櫻井某所領の内は小石川本所といへる地名を加へ島津孫四郎と

云人も此地より法林院松月分の地を領せり菊岡站涼云記せり

膜橋の下を流る所の水脈小石川御殿の南より傳通院の後柳町を流れて水府公

御藩邸の内を歴水道橋の上のたもと神田川に會するその小石川の舊蹟ありといふを

田園雜記 小石川といふと江戸あり

赤坂社蔵

黄葉集 江戸よりより頃小石川と云所あり

久方は月見る宿の涼とも隣ありなり石川のふ

一はるの涼やありのこりこり

涼山

昭和三十九年四月五日  
三上藤土

道興  
准右

鳥丸  
光廣

芭蕉  
宗因





傳通院裏門

無量山傳通院むりやうせん だん せん じん 寺經寺と号す小石川牛天神乾の方二町をくり

あり浄家十八檀林の一員なり本尊阿彌陀如來ハ惠心僧都の作  
めり當寺ハ明德年間了譽上人開創せり梵刹より寮舎百餘  
御靈屋れい や 傳通院殿の御靈屋なり御遺言は依て御廟を建らし

奉る和漢三才圖會ハ慶長開山堂かい さん だう 本堂の右ハ幡宮はた ぐう 同所あり天正年間一先  
七年壬寅八月二十九日逝去とあり辨財天祠べん さい ぜん じ 當社ハもと白山御殿の地あり白山水川と

文字ある右の額を得り別當ハ影久院と号しべん さい ぜん じ 當社ハもと白山御殿の地あり白山水川と  
して辨天ハ御請多入藏主稻荷社い ね づか じ 境内裏門の方あり往古狐僧ハ此自の

論をとり後ハ稻荷ハ御請常念佛堂じょう ねん ぶつ だう 塔中眞珠院たか ちゆう じん じゆ げん 新念佛堂しん ねん ぶつ だう 同瑞真院

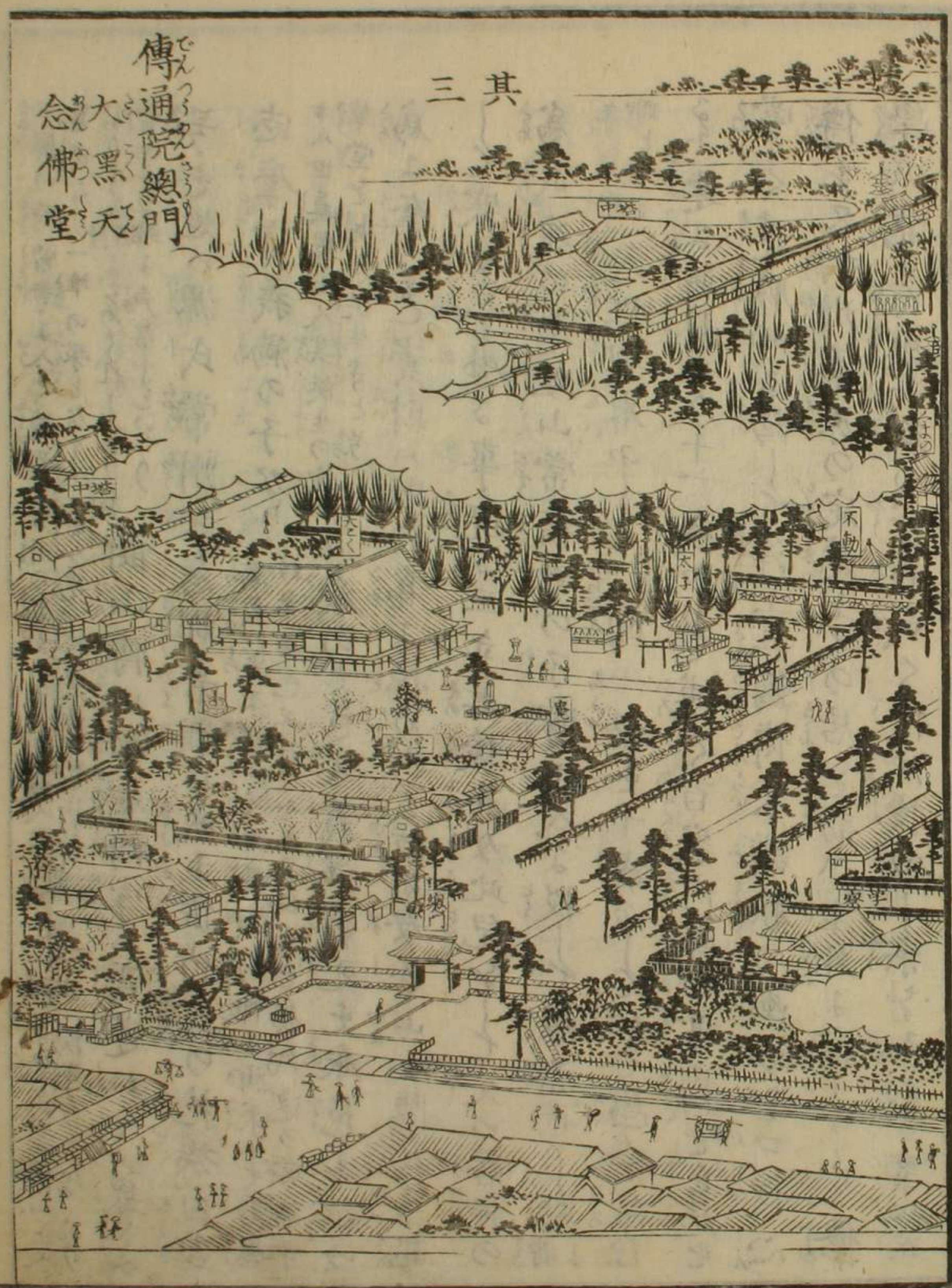
大黒天だい かく ぜん 寺中福聚院あり菊岡治宗云く初井と掘り其土中より此尊像を得り  
播磨民の構の内と云ふと云ふ極樂水は混せしむん彼井も又同一屋敷の

中よりありの所ハ井泉なり其一二カ  
縁起云く當寺ハ安置の大黒天ハ三國傳教の靈像ゆり大黒多門辨天等の三神  
一體の尊影なり孝徳天皇の御宇高麗國の大臣録來の古より人本邦に  
携來りて近江國蒲生郡ありしを明和年間豊譽靈應上人感得しと云ふ  
好置せし甲子日恭請集せり堂の額ハ福聚殿とあり當山第二十三世如空師  
の筆經堂けい だう 正面ハ聖教窟の額をかけ内ハ明木の一代藏經無縁塚む げん づか 享保六  
年辛丑











回録の時當寺に入、燒死する所の男女三百八十餘人の無聲蛙里談の山開上人  
墓所なり一堆の塚となり堂を建て稱名音と絶じむ開山傳曰釋聖同字八酉蓮社了譽と  
當寺の姓は聲なりとあり後開山傳曰釋聖同字八酉蓮社了譽と  
号を姓ハ源氏常州久慈郡岩瀬の城主佐竹氏の花族白吉  
志摩守義満の子なり滿或ハ光ハ作父母若瀬明神ヲ祈求ト誓應  
十八世眞譽上人其誕生之地ハ五歳のとき父義満戦死を采邑を敵の  
草堂を闢き誕生寺と号す四年辛巳正月二十五日誕生後凡連ヲ常福寺  
爲は棄つる資財ハ賊の爲は掠めらる故ハ母子山ハ隠れ落魄  
して寒暑を歴る事既ハ三年其後其母此兒をとして父の菩提の  
爲ハ連の草地山常福寺の了實上人ハ投して難深せしむ時  
年八歳聖天性聰睿中一聞十悟を十歳中始て學を試む  
爾と号す爾と号す天性聰睿中一聞十悟を十歳中始て學を試む  
多不速ハ通習せり十一歳中博く百家内外の書籍を自見を  
嘗く蓮勝師ハ謁して淨土三國傳來譜脈の幽妙を口授心  
傳也又相州桑原の定慧上人の居を訪ひ坐外ハ寓し修  
學ハ竟ハ白旗一派の宗義成く傳法授戒ハ宗を弘む事四五

箇年

白旗ハ寂惠上人所住の地の名アリ以て宗名とす

道俗化

と蒙る者甚多一師年四十六常陽小

還る時ハ實師齡已ハ八旬則問師をして常福ハ主たり年七十五

又應永二十二年乙未のヨリ武州小石川の畔ハ閑地をト年七十五

一字を營修今の傳通院傍ハ清泉あり今の極樂水則元祖の舊

跡ハ準擬してその水を吉水と号し師無量山ハ住を更練ハ六年

一夕微疾を憂ハ安然とて沐浴淨衣ハ辭世の偈を書して云く

放行把住滿八十年即今端的

書畢て端坐合掌ハ口ハ宝号を唱へ西へ向ひく奄然とて

寂を昔ハ應永二十七年庚子九月二十七日世壽八十師常ハ坐

する時ハ則面頂ハ光彩あり恰も半月の如く書ハ對する時を

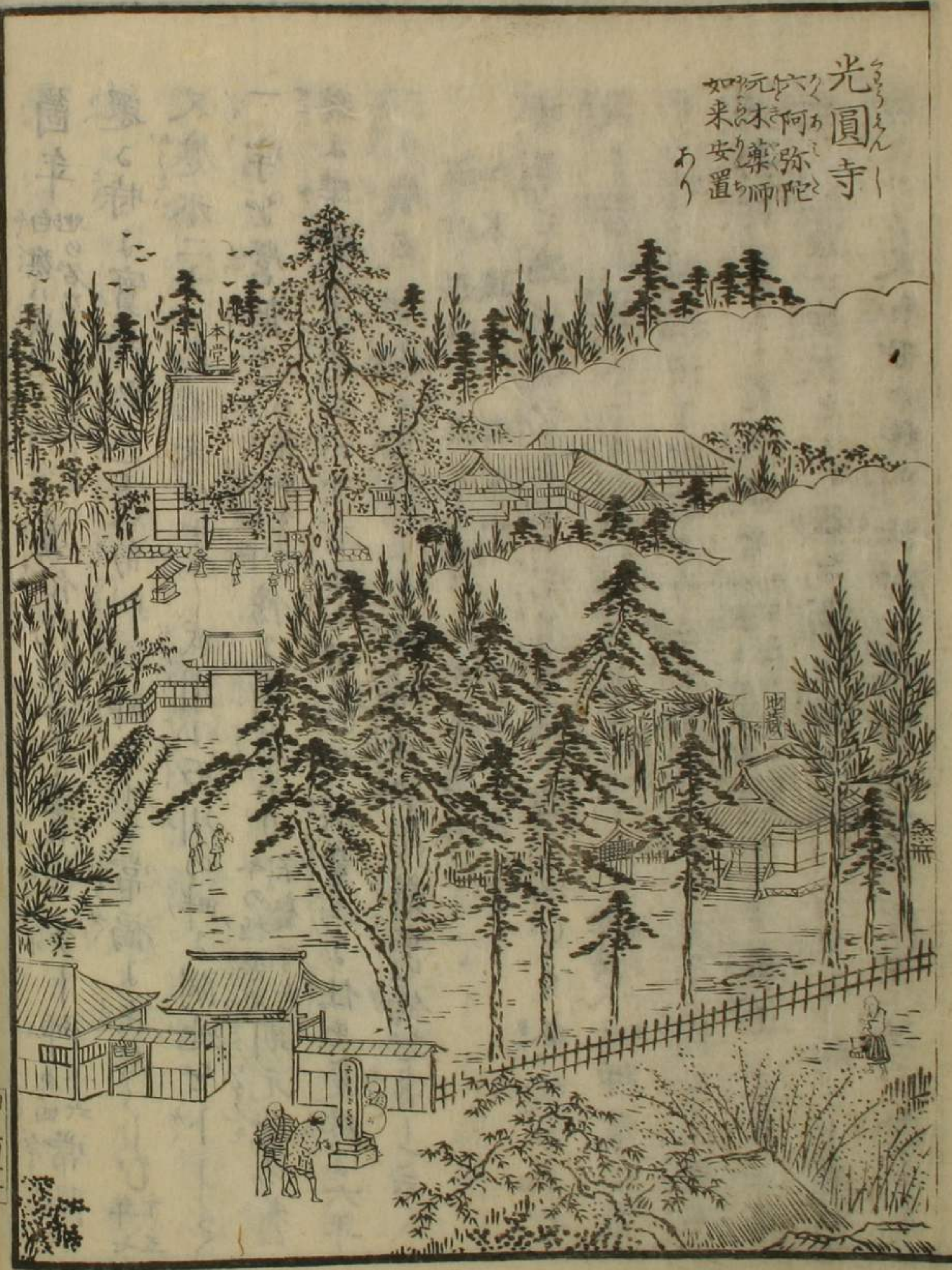
其影的爾とて相映を此故ハ世ハ稱して生平撰述の書ハ牛小

汗ハ文藻ハ煥然とて微を窮め妙を極む世譽く師ハ十徳の

目ありと又和歌ハ頓阿法師ハ傳受ハ古今此序注十卷を製を



光圓寺  
阿彌陀如来  
 本尊  
 安置あり



法器豪英ゆへ道徳ハ終古小隆盛ホシと聲ハ宇宙に高しと  
 謂川べし縹門の柱礎浄家の棟幹なるものなりと  
以上了譽上人傳の

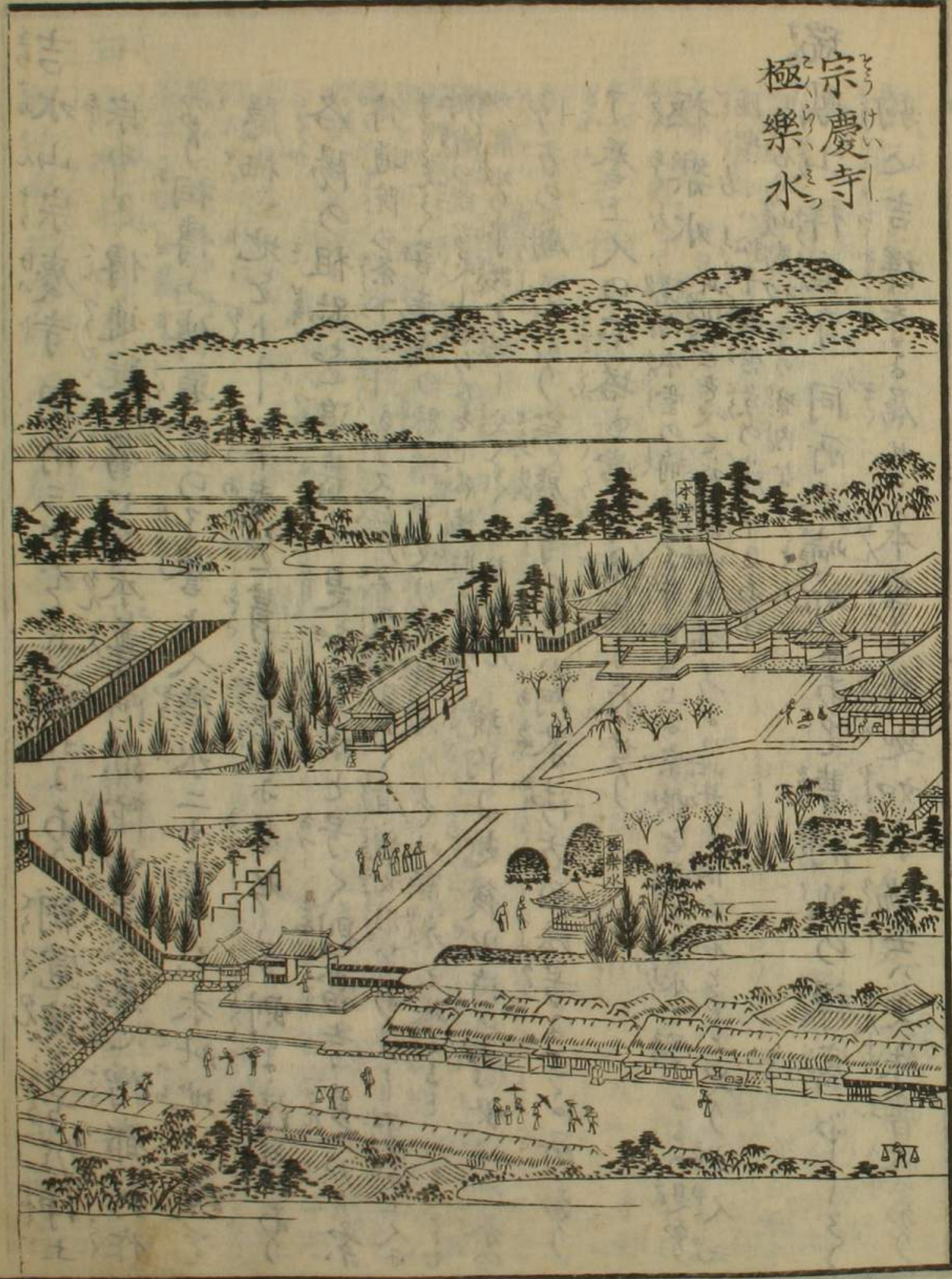
摘要  
 當寺ハ浄土宗流の一派なり所化學道の談林なり学業を  
 勤むる輩聚螢映雪の功成積て眼を經論の面よはし五重  
 相傳の窓前を五念修行の悉地を求め三心具足の床のえ  
 わね住不退轉の法義を期す

中臺山光圓寺醫王院と号は傳通院の西二町あり久保町と  
 云よあると浄業の精舎なり傳通院の閑山了譽上人當寺を  
 興復あり  
上古の閑山ハ行基大士とを了譽上人の時浄宗より更なるなり 本尊阿彌陀如来の像ハ惠心  
 僧都の作あり  
當寺と中臺山と号するは此地舊中臺村と云ふ由縁記あり  
 本木薬師如来 同寺よ安を本尊ハ行基菩薩の作り一尺の  
 立像なり慈母薬師女の脚影を摸し故小女體ありとのふ



毎年四月八日十二日閑扉結縁せむ  
 縁起云天平十三年辛巳行基菩薩十三歳東國の群類を化度  
 せむと先南紀熊野權現へ赤籠あり歸路傍に杉杉  
 大樹あり此を像材と佛像を造立せんと其木を伐り誓て  
 云く若此の佛意不協ひない此木我小先刻く有縁の地に至る  
 至ると云く彼所の谷川は流さず夫より東國は赴き此地に  
 至るもあふ不彼靈木あはれ入江は漂着也往古此邊より高田の辺に  
神田橋の内外迄まで此の  
 江河なり仍佛意を尊と慈母の爲則東方に向ひ香華を捧げ禮  
 拜なり信心の誠を盡しあふ然るは面親藥師女金色の光を放  
 ちて顯れまふ依り行基菩薩件の杉の本木を以て此本尊を  
 模刻し此境は一字を管んで安置せり又六道流轉の衆生我  
 救へ爲末本を以て六所六所の弥陀像を彫造し六所は分ちあり  
江戸六阿弥陀と  
稱するもの是なり

宗慶寺  
極樂水





吉水山宗慶寺 同所三町をり西北より朝覚院と号し浄土

宗より傳通院に屬せし本尊阿彌陀如来ハ惠心僧都結作

なり相傳ふ傳通院の了譽上人應永二十二年乙未此地に至り

隱栖の地をト一草庵を背くあり居せしる側は清泉あり

洛陽の祖趾を追慕し是を吉水と号く則當寺是が宗

傳通院の条下は詳あり又江戸名所記云く昔龍女形をあらはし了譽上人ハ

まろく善薩戒の脉譜を受け其報恩とて此靈泉を捧ぐるとありとも

附會の説あり恐りく下谷懺隨意院の境内は越後少將の清女公阿茶の

妙龍水の事と混へ交へく云なりん 境内は越後少將の清女公阿茶の

了譽上人の石塔も當寺境内に存せり

極樂水 境内本堂の前は井を云上は家根を覆ふ吉水と号するとも是あり

極樂水ハ松平播磨侯の藩中よりあり

瑞鳳山祥雲寺 同所戸崎町はあり曹洞派の禪窟あり

駒込吉祥寺は屬せり本尊ハ釋迦如来脇士ハ文殊普賢あり

寺記云當寺ハ天文元年癸辰遠山隼人正創建の精藍あり

小田原北条家の分限帳に遠山隼人佐江戸平川を領せしとあり

六年甲子正月八日北條國母墓の合戦に討死せし人ゆり當寺に靈牌あり

正圓居士と當小永祿七年甲子寺成り浄光院と号し

永祿三年庚申二月九日花陰宗順大禪定尼と稱し此尼ハ遠山隼人正の室中

北條上徳の女なりと云後浄光の文字傳ある故小室永の項今のゆく祥雲寺と

改む吉祥寺第二世大州安充和尚を請く開祖と云云

今の市城内和田倉の辺あり吉祥寺其項の同い返し今ハ吉祥寺も駒込

引板も當寺も國初以来駿河臺に引こ小石川金杉より引こられ今ハ今ハ

賜り寺院と引こり由大明心越 茨木春朔墓 門内右の方鎮守稲荷祠の

禪師撰より酒徳院解翁博士居士とあり又左は辨世の和奇二首を鶴を春輝ハ慶安に

擊と彫右は酒徳院解翁博士居士とあり又左は辨世の和奇二首を鶴を春輝ハ慶安に

項の人ゆり酒井家の儒醫家三浦氏の親なり延宝八年庚申正月八日酒を戲号を

地黃坊傳次と云始江戸の大塚は住一後鶴聲を産し後生平飲酒ハ長一同一是

原は住池上太郎右衛門底深と云く醉客と酒載せし嚴編なり當寺は所石碑ハ

酒門の高表菅杖と云く人遺せしと云遺骨を葬せし墓ハ谷中妙林寺よりあり

猶第二卷大師河原の 翁下は詳載す

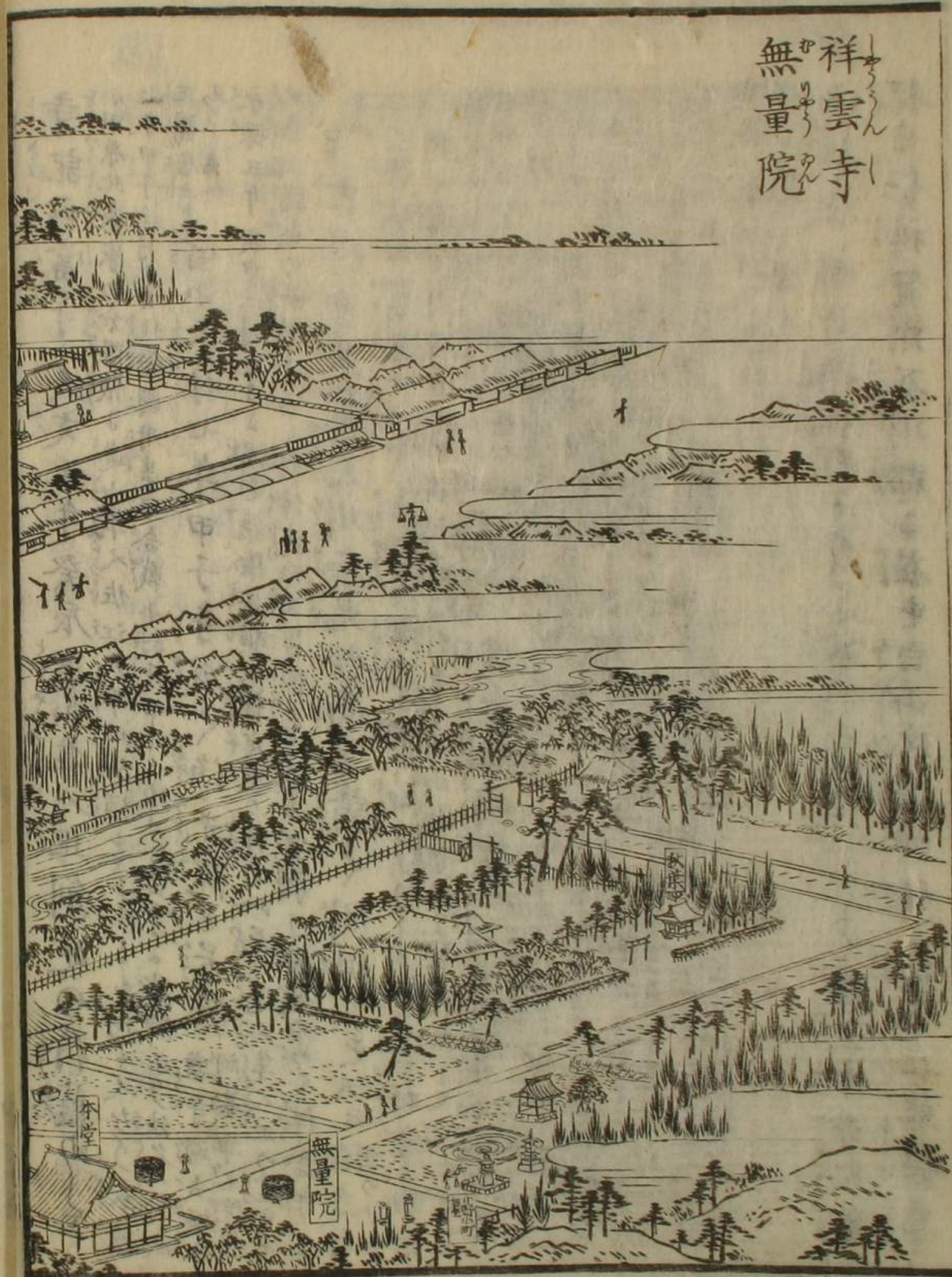
白山神社 同所指谷町より小石川の鎮守中々神主中井氏奉

白山神社

同所指谷町より小石川の鎮守中々神主中井氏奉

祀を祭神賀州石川郡に在る白山比咩神社は同伊弉册尊



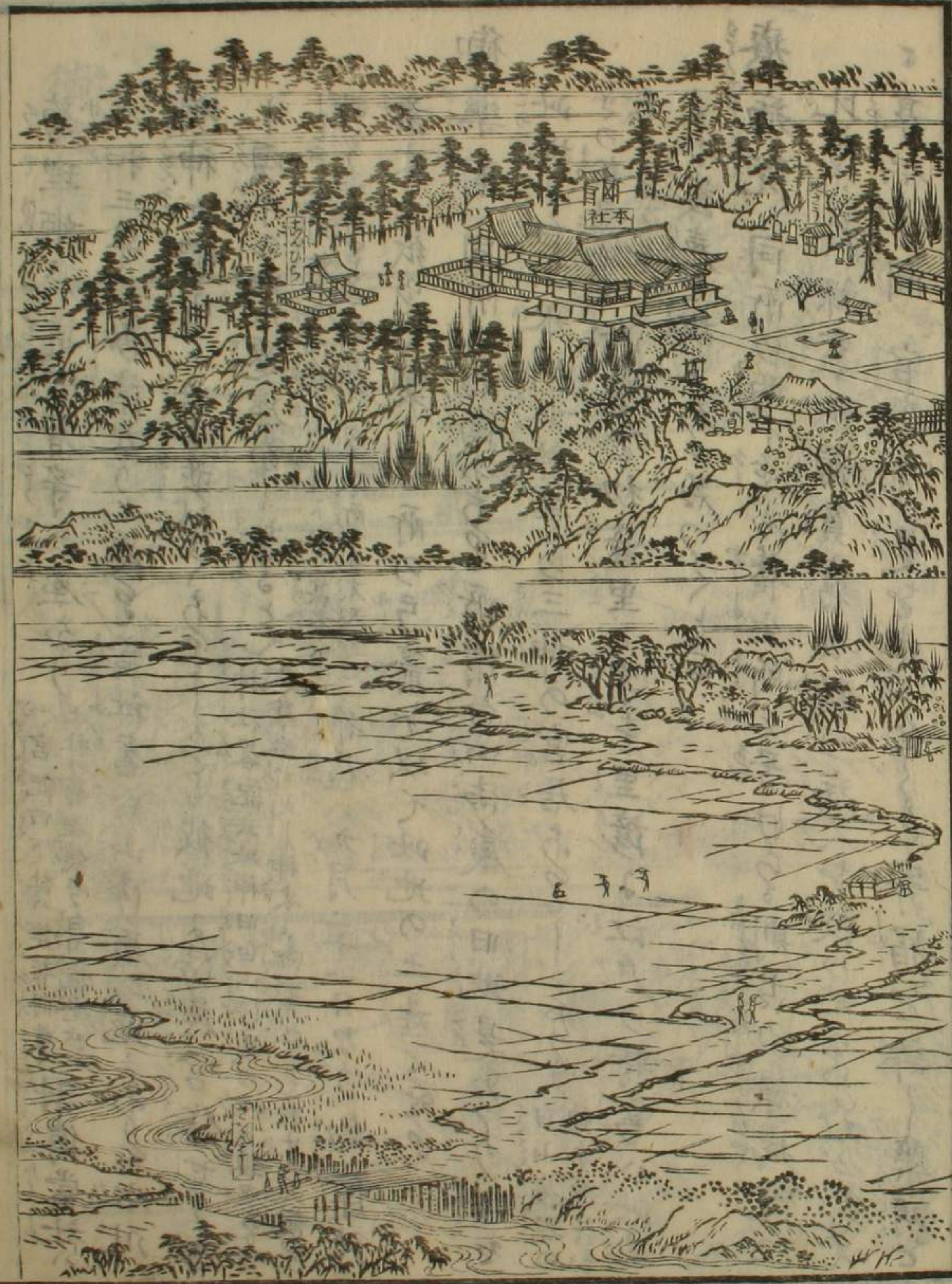




小石川  
白山権現社







氷川明神社  
聖問庵跡  
祇園橋



猫狸橋



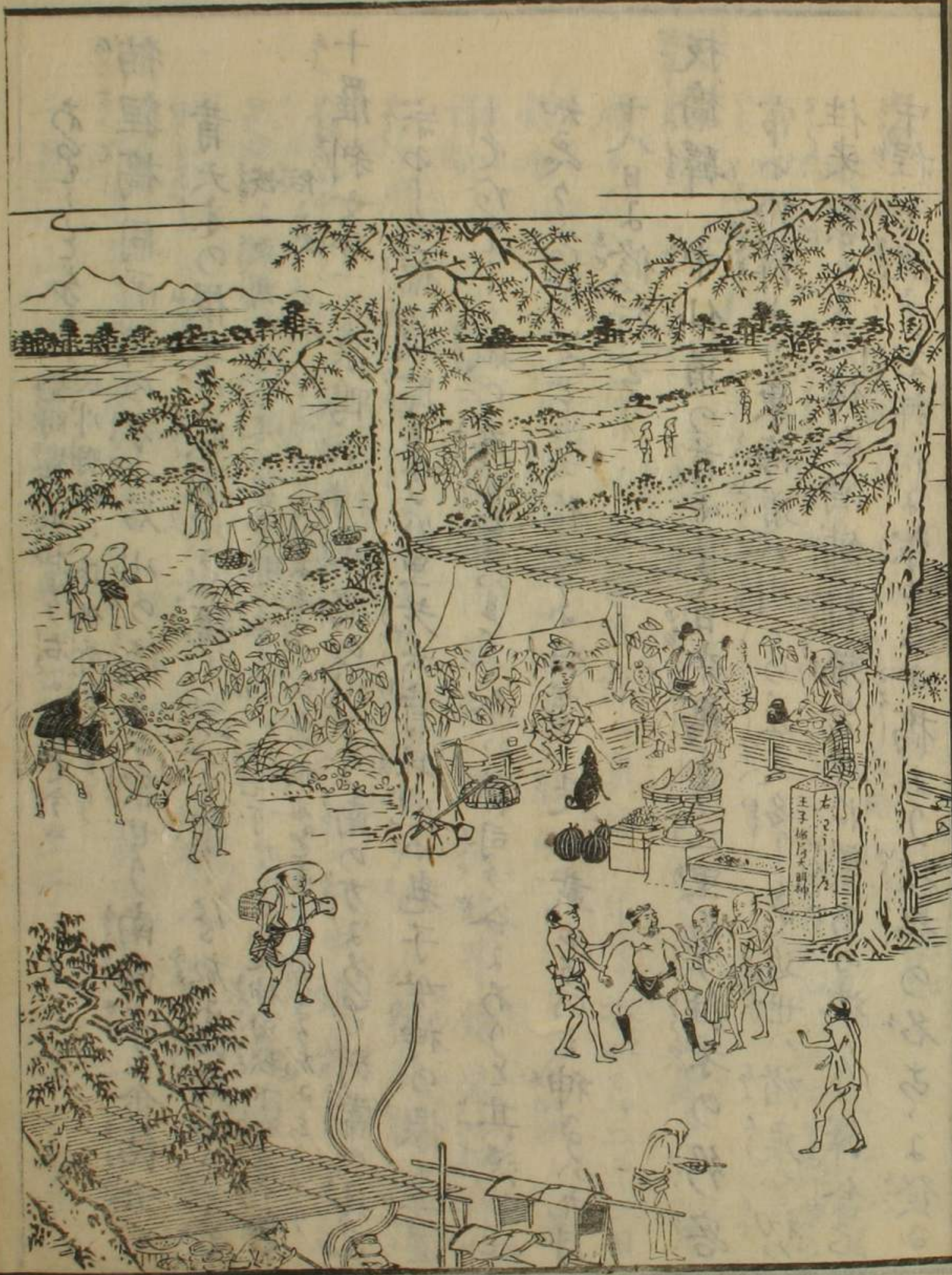
菊理姫泉道守者等三座あり 一宮記曰下社ハ伊弉册尊 相傳當社の  
 元和三年の勸清なりとて 上社ハ菊理發号白山権現云々 當社舊白山沙殿の地ありて氷川  
 明神女體宮と共ニ並びてありとて 其地ハ沙殿宮作せし  
 一頃今の地へ遷座あり 神社器記云此神旧白山沙殿の地ニ鎮座あり  
其原始尤久シ神本ハ松葉松と無此の天樹あり  
詳云氷川社ハ今沙菜園の西ニあり其条下ニ 祭禮ハ九月二十一日なり 釣樟此  
 番本と紙ありて製する所の弓箭を以て此地の土産とせる  
 御薬園 同所の西南ありて所謂白山沙殿の旧地是なり古  
 此地ハ白山氷川女躰等の三神の宮居ありとて 白山権現の  
神本本はか  
きの松も此地ニ 此邊を初音里と字を里彦ハ江戸の時鳥ハ此地  
存せりと云  
より 發声を故より名つくと云  
 療病院 同所の西ニ並ぶ養生所と号けらる則古の療病院に  
 比せしれ 鯉寡孤獨貧窮無頼の病人を救はせむらひむためん  
 享保年間 官府より是を建せしむと寄宿を許し藥餌を





賜ふ所仁惠實は百世不冠たりとのべり  
 氷川明神社 同所西北の方五町をかりふあり相傳ふ 孝照天皇の  
 御宇に鎮座なりと云く 祭神武州大宮の氷川明神と同一昔ハ  
 白山御殿跡の地ありと云く 白山権現と共に地を替せせらるり  
 より當社ハ此地に遷る極樂水宗慶寺の持よりて祭祀ハ九月  
 十日なり  
 武藏國風土記曰 足立郡巢鴨郷氷川神社 觀松彦香殖稻  
 天皇御宇三年戊辰所祭素盞鳴尊大己貴命奇稻田比咩  
 合三座也云云  
 按此巢鴨の地昔ハ足立郡に屬せしなり今ハ豊島郡の内に入り  
 當社ハ千有餘年を経る所の宮社中へ八幡太郎義家公興  
 州下向の時當社は叅籠ありと云傳ふ 中古荒廢し其形  
 を勿し残るしを傳通院の開山了譽上人此地の幽邃を愛し  
 庵を結んで聖同庵と号け此地に閑居ありし頃宮居を重修







あらしとあり 聖岡庵の本社より右ありて今ハ  
水小明神の流所なり

猫狸橋 同所西の方小石川の流も小架せり南向亭茶話云く

昔大木の根本の根を以て橋よかへて架したる故此名ありとぞ

按東國の里俗木の根を根本と唱ふ此説可なり又神田松下町の小路を  
俗は根本と唱ふ材木屋多く住んで根本を賣家多きか故か

十羅刹女堂 巢鴨本村藤橋の川より南の方ある別當ハ真言

宗ゆくと福蔵院と号は里老云昔此地ハ鬼子母神の像も安置

しつらりて賊の爲に奪つと今ハ雜司ヶ谷ありと其説是非

知るべしと云傳ふる任せし是を載するの神は九月

十八日は修行せり

板橋驛 中仙道の首ゆき日本橋より二里あり往來の終客

常小終驛より東海道ハ川の差支多くと近世ハ渚炭を初め

往來繁りて傳舎酒舗軒端を連ね繁昌の地より驛舎は

中程を流る石神川ハ架する小橋あり板橋の名あり發る

板橋ハ上下に分て此地を下板橋と稱し上板橋ハ練馬  
と稱し  
板橋又ハ板橋と唱ふ義經記より小田原北条家の所領帳ハ  
板橋又ハ板橋と唱ふ義經記より小田原北条家の所領帳ハ  
板橋又ハ板橋と唱ふ義經記より小田原北条家の所領帳ハ

板橋原 都より上下板橋と稱する地を指て云ある一此地ととる

廣々たる平原なり中古治乱記ハ貞治六年丁未四月二十六日

鎌倉管領足利左馬頭基氏逝去を其弊を衆一芳賀入道

禪可子息伊賀守高貞同嫡子八郎高政等鎌倉を押寄ん

と一應安元年戊申正月五百餘騎を引卒一越後國を進

發あると同日武州板橋原を打つ此由鎌倉へ聞えしが

執事上杉憲顯其身ハ鎌倉を守護一子息兵庫頭憲將

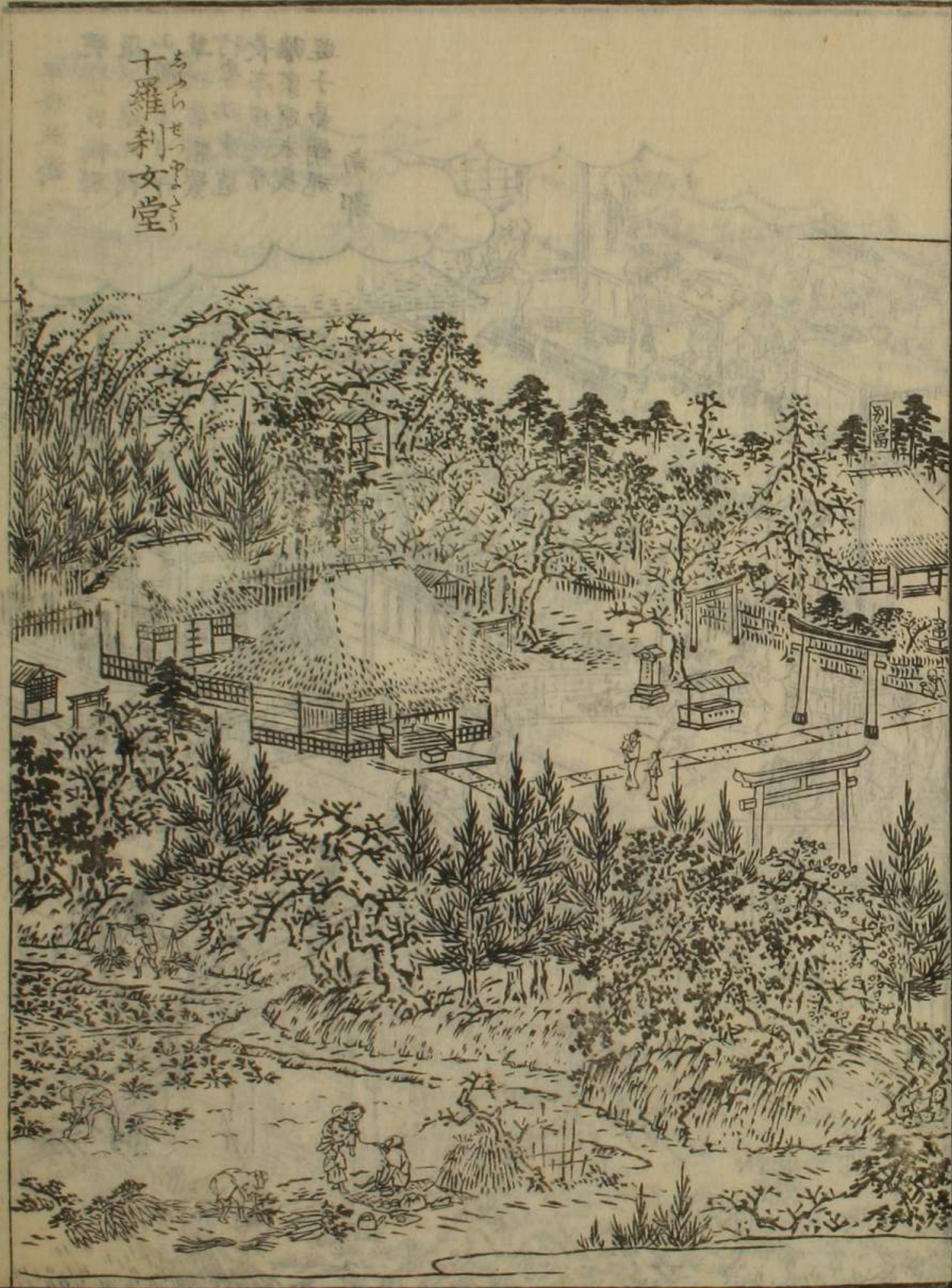
同兵部少輔能憲等を大将とて千葉介直胤小山朝明

以下其勢二千餘騎是も其日武州洲賀茂といふ所は陣とり

千葉小山が手勢五百餘騎を引分て王子の森に置とあり



十羅刹女堂





板橋驛



早發板橋  
曉發板橋驛  
迢々遠北門  
山掃著日早  
草短履霜繁  
行李臨東道  
長亭徑大原  
離家還未幾  
遊子易銷魂  
南郭





孤雲山乘蓮寺 慶學院と号を同所橋より三町あり此方道より

左側より浄土宗の縁山は属を本尊阿弥陀如来の像を  
佛工春日の作開山ハ英蓮社信譽上人了賢無的和尚と号は

當寺ハ應永年間の草創中此地の卿主板橋信濃守忠康  
といふ人の菩提寺なり當寺五世明譽上人龍宅和尚現住の頃

天正十九年辛卯 御當家より守護不入の朱章を賜ふ又  
寛保三年癸亥の夏 大樹此辺涉遊獵の時當寺に憩をせ

相生杉 寺の後園ありむす此辺涉遊獵の頃此杉の号を同りせり住僧  
女男松 堂前あり天下泰平を祝

板橋忠康墓 同境内あり碑面は本樹院殿前信州空山有賢禪定門  
信濃守忠康ハ豊島氏なり北条氏直へ仕へ此地は住りて板橋と名はる

小田源記ハ大永四年二月十三日北条氏綱と上杉朝興と合戦の時朝興討負く板橋をきて  
引退く此時板橋の某兄以下討死すとあるも同ト氏族の人あり又同書ハ天正元年十月  
下旬下總國宿の城主築田中務大輔佐々木一味とて企てて小田原より氏政  
を病しと聞かへ取吉合戦あり頃小田原が武州の石濱の城主千葉次郎城方の物頭菊間  
因書といふ者と相争つて千葉次郎討死を此時石濱の千葉家女子がかりバ比叟の下知  
宮内少輔支那あり彼与カ衆ハ板橋肥後守板橋の城主なり  
松戸越前守ハ赤塚の城主あり此肥後守又同ト氏族の人あり

木下稻荷祠 同一驛の端を街道より左の小路を入る智清寺と

云る浄家の寺は安置は元和三年丁巳當寺中興心蓮社法譽上人  
輪宗和尚感得せられり神像なりと云相傳ふ豊臣秀吉公

のまゝ木下藤吉郎と稱せられ一頃此尊神を崇信し一は既に  
して天下の武將とありあを以て世は木下出世稻荷と稱し

清水坂 志村あり世は地藏阪とも号く舊名ハ隱岐殿坂を

呼べも昔隱岐守何某闢りて故ありといふ次熊野宮の此地嶮  
岨中て往還の行人大に惱り依て寛保年間大善寺に住守





来蓮寺  
 相生松  
 女男







清水薬師  
清水坂  
境内山の腰  
あり清泉  
如き故に清  
水の号あり  
此辺夏葡萄  
を名産とそ  
清水種とく  
世に賞し  
たり





直心和尚僧西岸と力を戮いせ勸進の功を慕い本を伐荆を  
刈く石を置く階とをあるひつより行人苦難の患を道す

清水薬師如来

清水坂の下より醫王山大善寺と号し曹洞

派の禪林やぐ芝の青松寺に属せり永正年間此地の農氏新見

善左衛門といへる人閑基を善左衛門法名を清雲大善庵主と号す其後元龜

年間に至り青松寺の雲崗和尚の法孫在天禪師住職し

法燈と掲ぐ本尊薬師如来ハ聖徳太子の真作なりと左右

取壇に十二神將の像を置く境内清泉湧沸を一年

大樹此地は遊獵の頃當寺へ立寄らせぬ此清泉よりて

此本尊を清水薬師と称す旨命あり爾よりかく唱ふ

此清泉ハ寺前山の涯下より流れて近隣の村落皆此水を

以て飲む此辺蘿蔔を各産とせし清水が根と稱し其徳を賣買

千葉家城趾

同所より西へうけく耕田に臨み一臺の地成

指くいへる今も空壑の如き形所くは残まり

此地より南の方を中臺といひ又西の方一里計より小

西臺と云地あり何れも城營の舊跡たりといふ

熊野権現宮

同所清水坂の上より三町をかり西の方涯續より

社の後ハ涯に臨み松杉等の老樹鬱蒼たり就中樟の大樹ハ

周圍三圍に餘れり當社ハ往昔千葉氏城内の鎮守たりとい

今ハ志村より西の臺地の間土人此地を隱岐殿やきと字を今奥の

院と称する地は石の小祠あり十四五年前此地を穿ちて古鏡

二面と刀一振とを得たりと語りされど其故をあらわさず

あつらんを恐る元之如く埋藏したる事あり

補一華表と石中又上の宮の地は別當ハ新義の真言宗なりと三次山

六百三十五株の杉を栽り

延命寺と号し中野法仙寺に属せり

此地の城主千葉隠岐守の家臣三次某の

霊と鎮守といひ傳へ



一夜塚 同所西南の畑の中あり此地を前野と号し相傳ふ小原北条家の時千葉家の城を攻落さんとて寄島の軍兵此地に於て一夜の間は炮坐を築き城へ向け此塚上より大発炮を放ち竟小城兵を焼討せしといふ

西臺山圓福寺 熊野権現宮より二丁をかり西南の方西臺村より曹洞派の禪刹なり芝愛宕下の青松寺に属す本尊ハ拈華法釋迦如来座像一尺四五寸あり行基菩薩の作なり或はのり歩首をかり行基の作る所なり全躰ハ後人の作なりともより太田道灌入道の開創なり越生龍隱寺第五世雲岡俊徳和尚開山なり雲岡開基の所なり當寺ハ旧河越にあり頃ハ龍隱寺に未寺ありしとあり今寺領二十石を附せる當寺は永正年間の古文書あり其文左のごとく

志村西代より内小原三郎より願者再面し留る

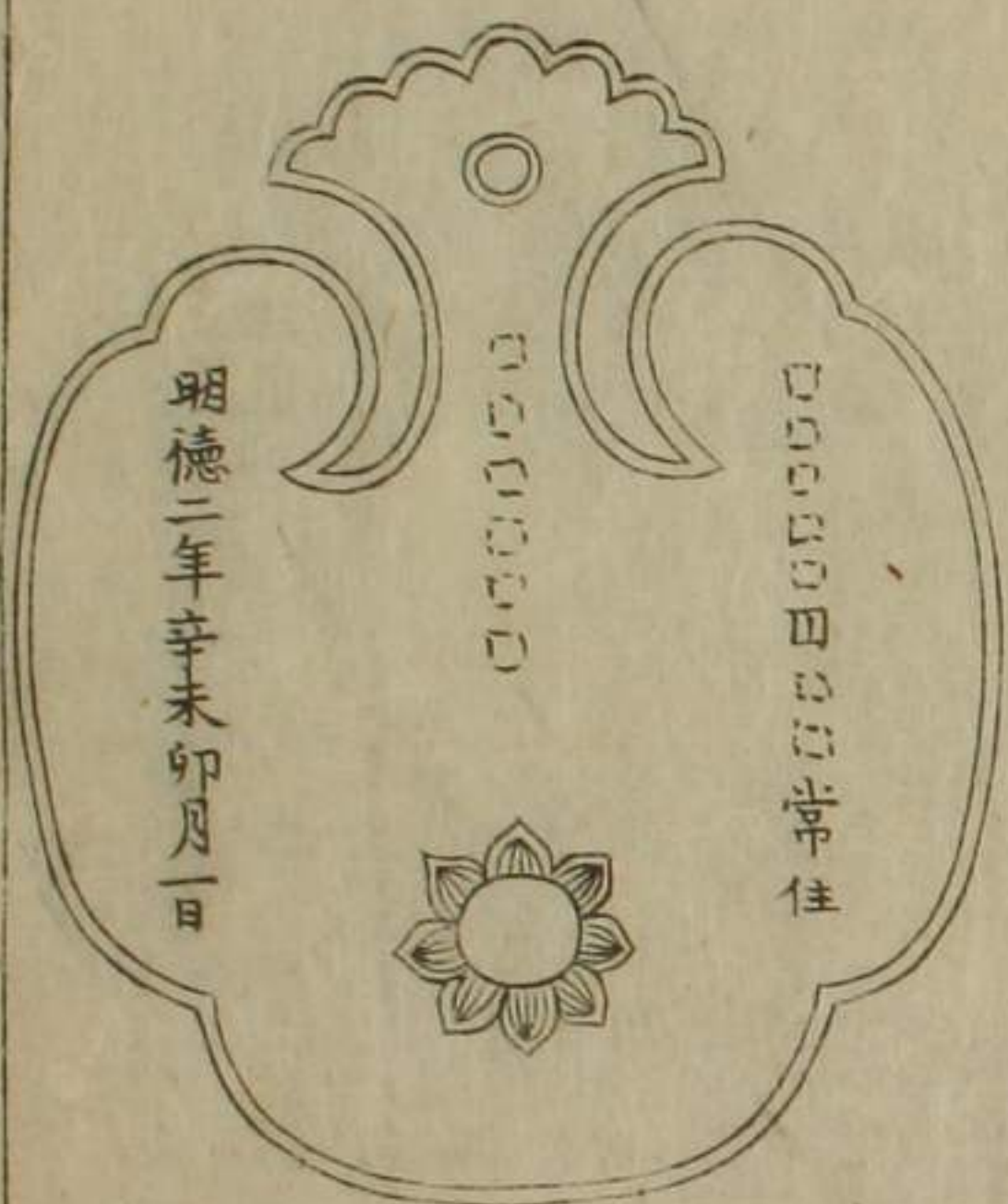
為宗あるに福寺は永代奇進中作又以前後勅解中時寺より面し留一枚書を中か教令貞一給より作爲後日奇進中状也別

永正十年癸酉十二月十三日

あ田彦六 老母

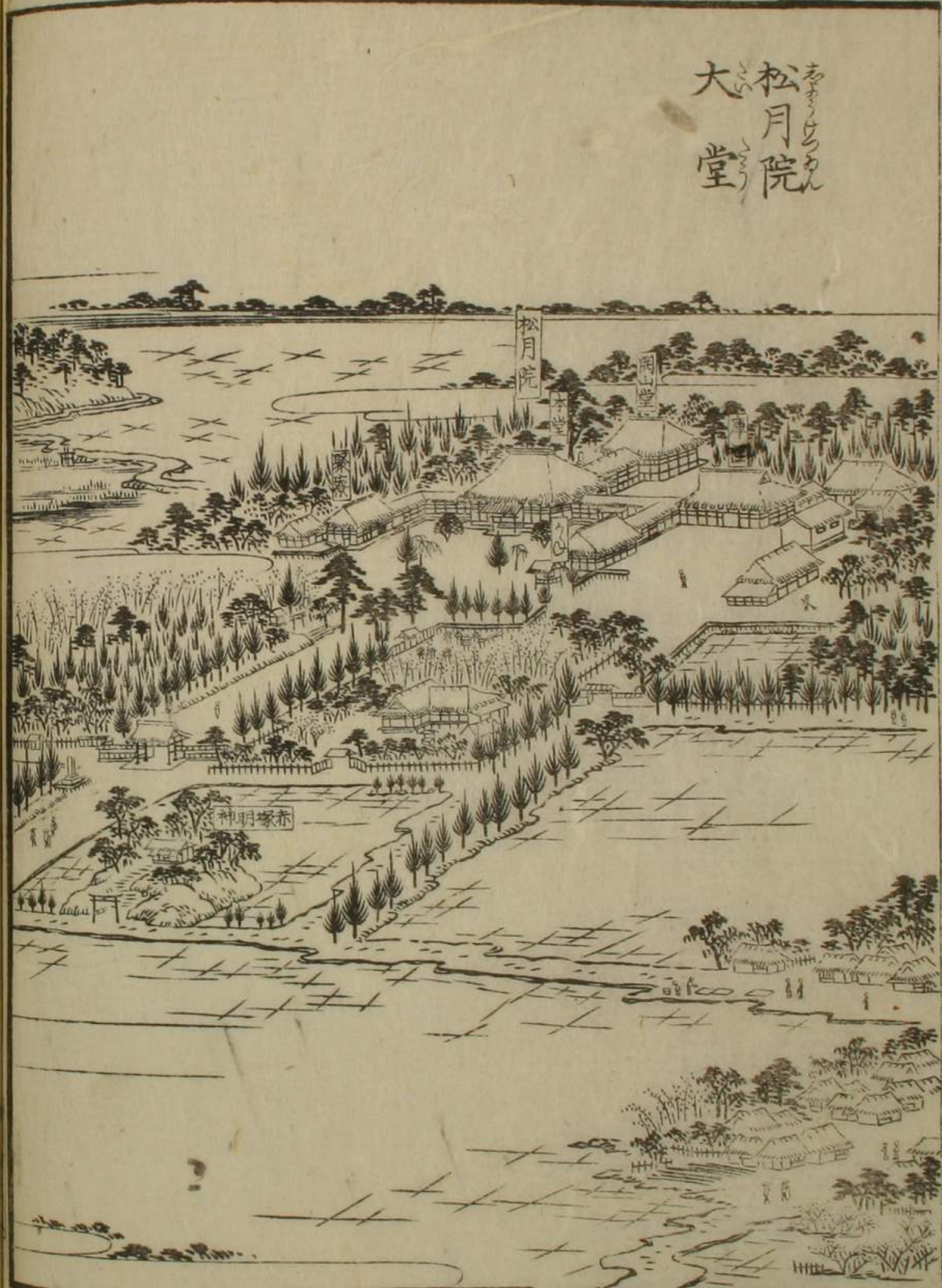
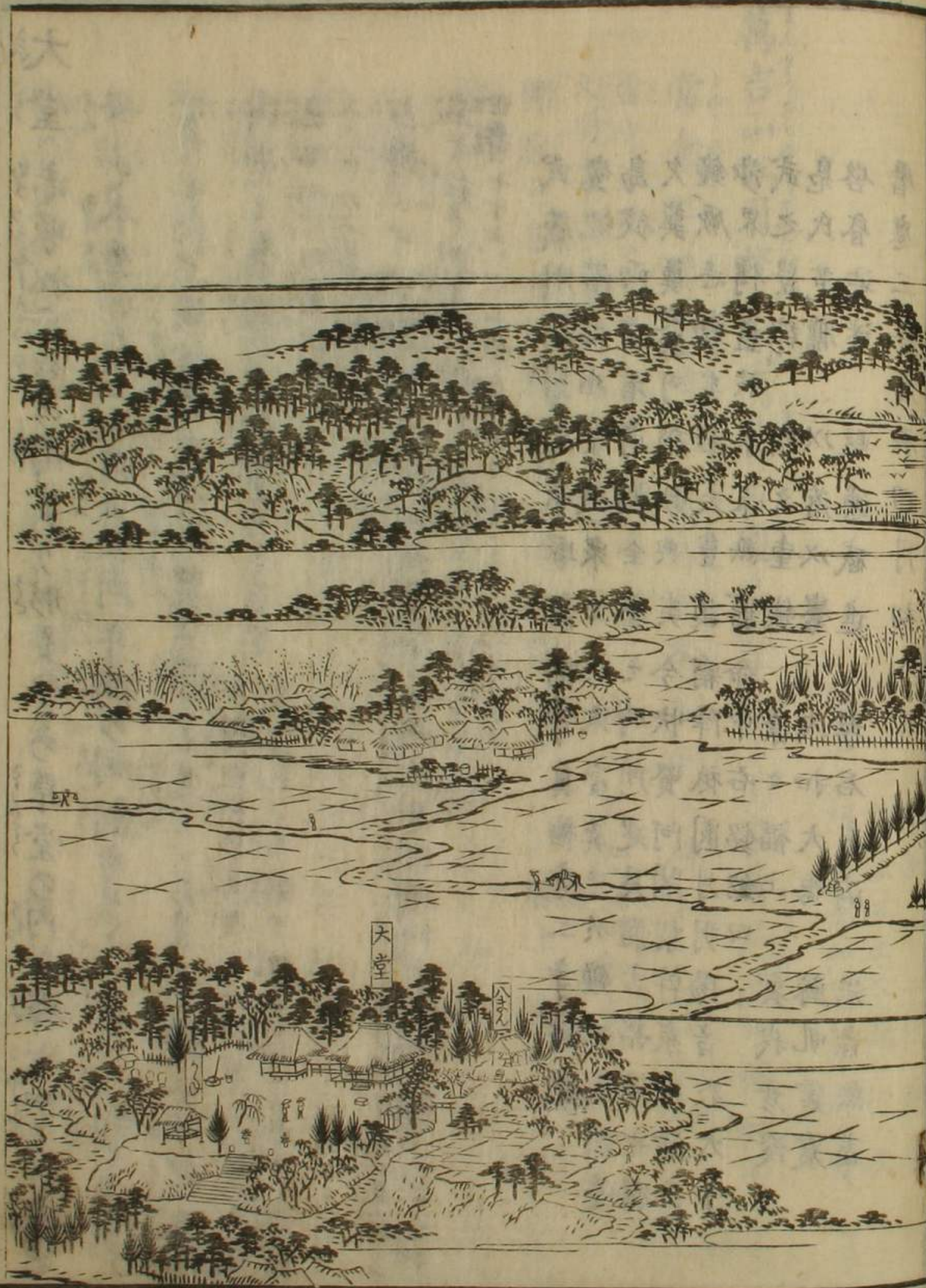
圓福寺の

往僧の志村城山の辺農民の地より小原面と字する田畠ありハ此多田氏の遺趾なりと古雲版 庫裡に掛るあり其形左の如く



長一尺三寸五分  
中一尺二寸五分







大堂

赤塚松月院の南あり形をわりの草堂の内小釋迦如來の像を  
安んず本尊とを土人傳云大同年間の開創なり古ハ大刹なりと  
なりされど後世教度の兵燹ニ罹リ焦土となりて僅小此釋尊の  
淨堂と舊鐘の殘まりとあり  
真福兩寺の舊跡を  
今釋迦堂の前後ニ上寺家下寺家と字  
まる此あり鐘の銘ニ存る所の泉福

古鐘一口 堂前あり長九尺五寸あり口の径二尺二寸ありあり此舊鐘の  
岩と松と東陽ニ廟法を永和元年正月八日示寂  
世壽七十云々以上鐵倉志ニ抄るとりありあり

武蔵州豊島郡赤塚泉福寺真福寺二寺鐘銘  
驚沈潜之幽壑破衆生之大夢莫先於鐘也武州豊  
島彼兩寺者前朝全盛之時所建具體古招提也獨  
欠箕篋之器可謂缺典矣今快賢阿闍梨幹衆緣鑄巨  
鐘厥志勤矣若夫豐蕞霜降祇園月明揚音於大千  
沙界傳蓋於未求無窮命崇右福山曰哀我彦俊  
武之豐郡州之重鎮大扣大鳴 鯨吼霆震  
息氏范瀟以落以鑿劫石有消 洪音無盡  
啓昏迪迷 遐邇感進 劫石有消 洪音無盡  
曆應三年庚辰四月初八日

筆執 三位親慶  
大工平次五郎行次  
勸進沙門治部阿闍梨快賢

萬吉山松月院

同所北の方通りあり

右あり曹洞派の禪林あり

常會地なり當寺ハ千葉介自秀開創の佛刹といひ開山を曇榮和尚と号し  
當寺卵塔の中ハ文明の古碑あり然るに開山を曇榮和尚と号し  
文明あり前ハ草創あり寺院あり  
佛殿の本尊ハ釋尊ありて作者を志しハ脇士ハ文殊普賢あり  
堂前左右ハ木犀の大樹あり禪堂衆寮方丈庫裡ハ左右並び  
て巍然として當寺ハ自秀の靈牌と稱するものあり松月院殿  
南州玄參大禪定門千葉介自秀永正三年丙寅六月二十三日  
とあり又其室の靈牌として龍興院殿了室覺公大身延德  
元年己酉九月十五日とあり墳墓ハ卵塔の中ハ大松樹の下あり  
古き五輪の石塔三基並び建ち中間ありもの尤古く蘇  
苔滑なり右ありあり自秀の名あり後世造を儲たりと



坊屋くくた小あるものも則其室は墳墓あり

赤塚明神祠 松月院の門前より所の一堆の塚上は櫛二三株あり

其下は小祠を營ま白山権現を勧請を土人云此塚の樹木等

觸るるあり時ハ必崇ありとく尤恐怖せり按上世高貴の人を葬

しつる荒陵なりん

武蔵國風土記殘編曰 荒墓郷 荒墓神社

武蔵國 豊島郡 荒墓郷 神貢五十束三字田云云

大化二年丙午所祭藤田彦也 神貢五十束三字田云云

十羅刹女宮 同所北の方より真言宗常福寺別當あり

田遊祭 毎歲正月十三日此地の農氏當社は詣り後常福寺は集會一夜

此祭事ハ初飾を掲げ三斗ありあり夫より搗所餅を以て教品の農具を  
造る物ありとのを陸奥とのとを以て製し牛馬の鞍に至るまで皆残らざる  
の後其具とて之を苗代あり始り苗を挿秋に至り實熟し川取に至る迄の間  
射しるる等とて農業に用ひしハ一ツとて其を農具とて其字はあり  
尤鄙俗のありりとて之を古とて其を農具とて其字はあり  
ヨナソウイナソウと稱するを老人の形をなせり安女とのハ婦人の假面をけ

太即次とのを藤田氏の假面をかきり尺を帚に次神と稱するを何れも鎌を  
携へざるありヨ子ホウと云ハ藁をまく製し婦人の形を井當をせざる  
其席へ引出し飲食せり未至り九万町の稻一万町ハ鎮守へあゆむ也去年の稻を  
蔵は積今年の稻は庭に積むとて終りとせ

按九万町の稻一万町ハ鎮守へあゆむとて古の井田の法はよるなりん  
今當國近在の農氏に里諺はあかぬと云ふは其故を問は耕田の中尤  
中間上の稻を公にせざるを唱へるといふも前より井田の遺風なるべき  
をあらわすの文字中井は作らるる井田の意はあかぬ

千葉家古城趾 同所西よりあつる岳をのみ土人城山とて今官林と

なり頂は畑ありされども空塹形杯其修は残り迄城内城と

覚しつる所を殊は今も城壕の形ありく水を湛へしと鎌倉大

草紙小康正二年正月成氏市川の城を圍む同く十九日落城

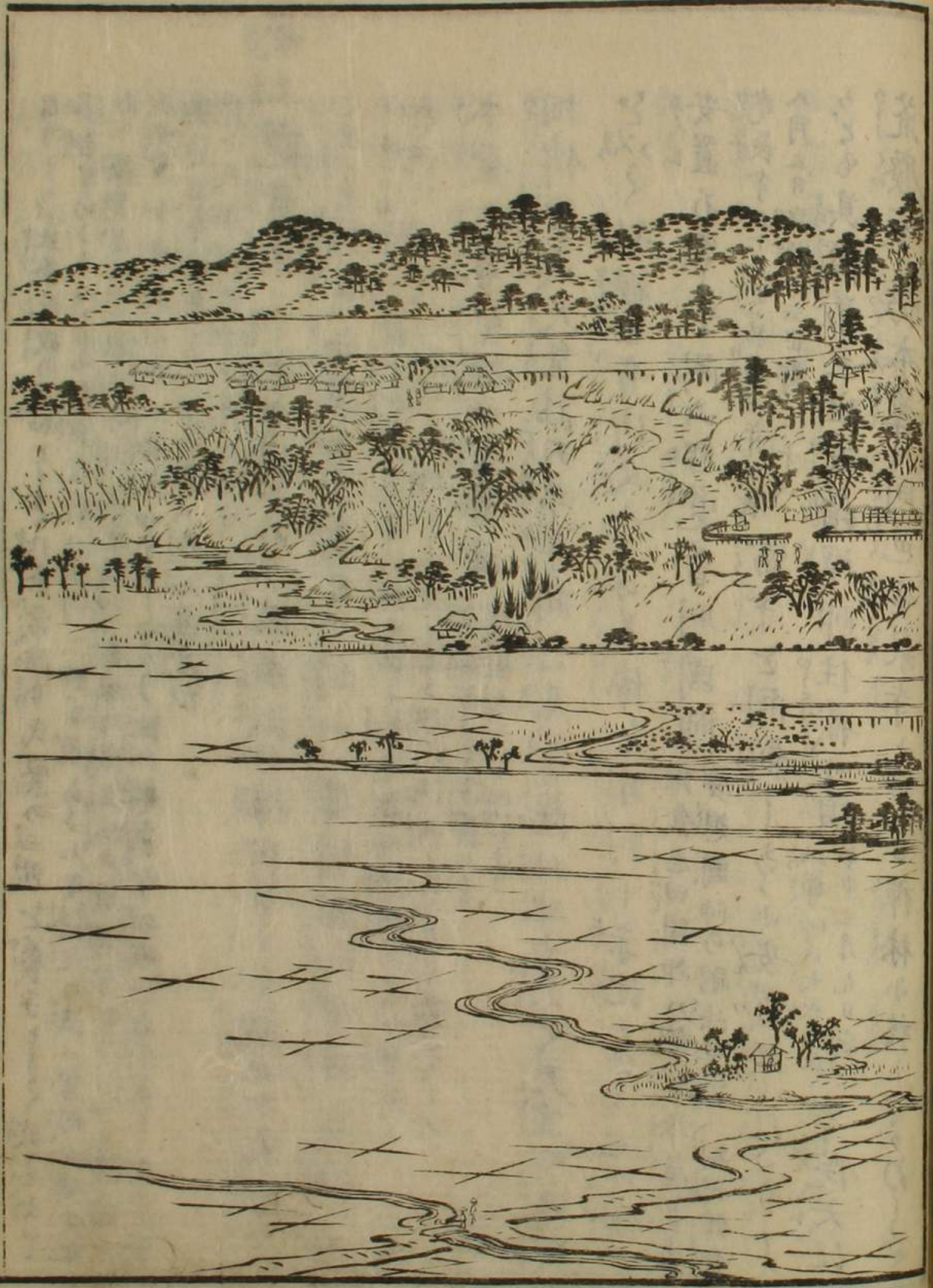
しつ實胤ハ武州石濱へ落行自胤ハ同く赤塚へ移るとあれバ

此所を自胤の居城なるる必せり按は松月院の開基とを傳

所の自秀も此自胤の氏族あるべし

按は松月院鐘施財の人名の中は當邑春日氏の人多し土人云く春日氏ハ  
千葉家の未裔なりとて殊は此地は其氏族多く今春日平右衛門といへる  
人の家は古文書ありといふ又小田原記は天正元年十月下旬下總関宿戦ひの  
時武州石濱の城主千葉次郎評死を此時石濱の千葉家女子をとり





吹上  
観音





なりし北条氏政の下知とて北条常陸介氏繁の三男を養子とて徳息女を  
妻合せり云々幼少なるに本内上野に預り上野の城に居り後ハ宮内少輔支那  
あり後与力かむを板橋の城主肥後守赤塚の城主松戸越前守なりと云々然時を  
石濱の千葉家の城主幼少なるにあり松戸越前守此城をあらうとてかかん  
猶弟五卷平塚の茶下等とありせり

吹上觀音堂

下新座村あり臨濟派の禪刹なり福田山東明寺

と号を同邑金泉寺に属せり開山ハ普明國師中興茲浄西

和尚と稱を當寺寛文十二年の鐘の銘に勸進普明浄西とあり縁起よ

本堂本尊聖觀世音菩薩立像ハ長八寸

相傳聖武天皇於天平年間行基菩薩此地に於て天竺の棕樹

を以て聖觀世音淨丈八寸の尊像を彫刻し赤池との池の傍に

安置ありとて開山智覺普明國師鎌倉志曰國師ハ妙葩春屋と号し

建長寺五十五世嘉慶二年戊辰八月三日化寂と云世壽七十八當寺を開創しあり安置せり

其後弟三世玄嶺禪師住職の頃此禪師ハ大永四年寺院大に

荒廢せり仍本尊ハ同邑金泉寺といへる禪林に移しありとて

一ヶ元禄年間信州より沙門浄西なる者此地に來り一頃

脚痛ありて行歩かなひごとく金泉寺に止まるとあり一夢中

靈感ありて其痛全快しこれ本尊の加護なるをを

報恩の爲當寺を再興し又新小浄丈二尺三寸の尊像を彫刻

し前の靈像をバ新き佛髻の胎中ニ籠りてありとて

なり然る往安永五年丙申十二月十日夜二更の頃觀音堂の

内陣より出火し火焰盛なりバ衆人近寄りあはれど不慮ハ既ニ

火中ニ埋れあり然る唯左の床と右の浄足とを焦のみや

全髻恙なし同邑ニ伊三郎といへる農氏あり夜明て後灰中ニ

探し尊像を得たりとて

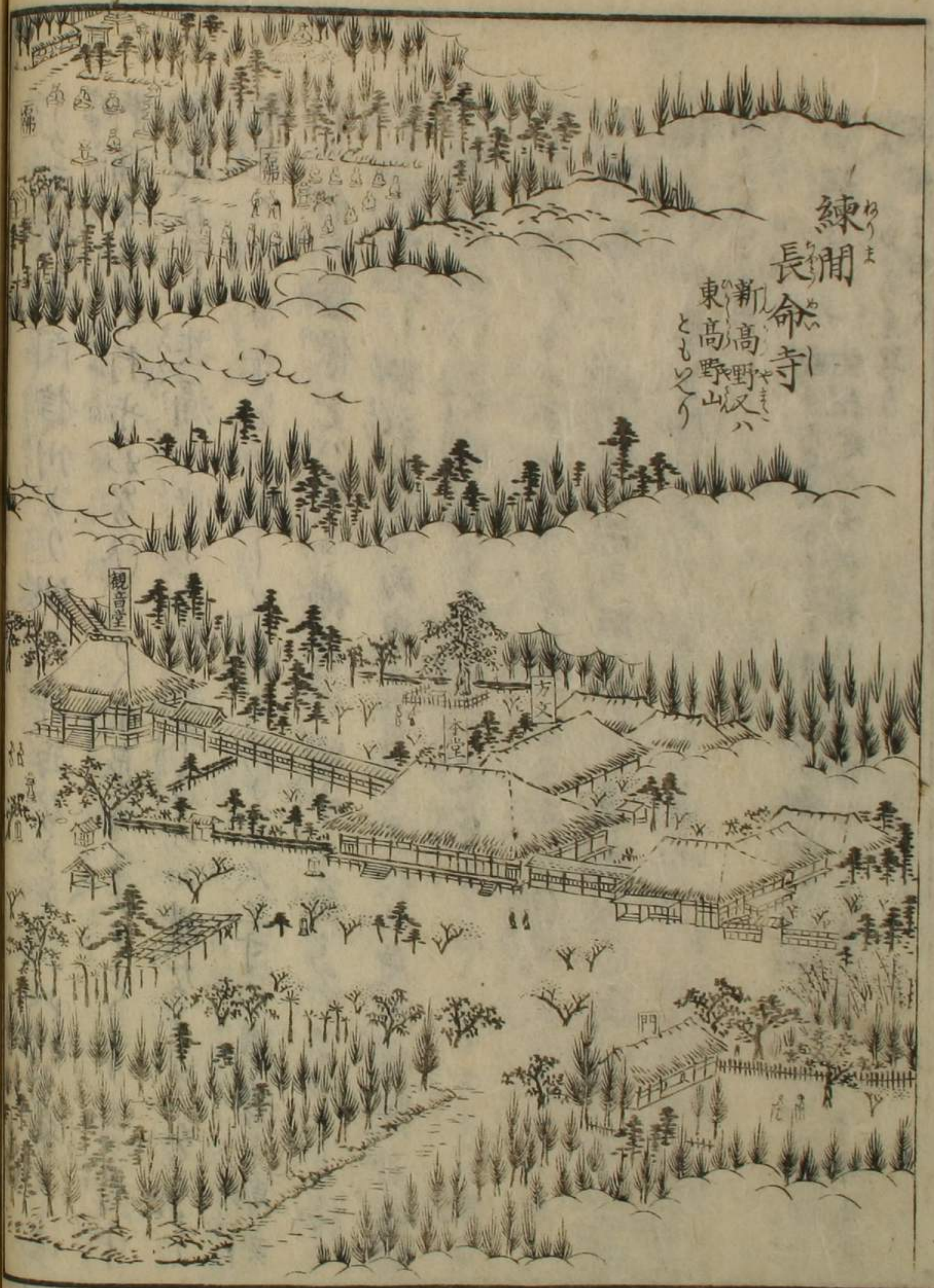
同十六日に至り

古鰐口一口渡り六寸五分を厚サ二寸餘あり正保三年丙戌十月觀音

堂再建入佛供養の爲開帳なりとて寺境赤池と

其銘は曰く





練間長命寺  
新高野山  
東高野山  
とりてり



面 吹上聖觀世音堂用之 大工飯田弥七

背 武州新座郡下村福田山東明禪寺存貞代置之  
于時元龜二年 拜六月朔日河村弥二郎殿寄進

按河村弥次郎ハ小田原北條家の屬下あり一永祿二年小田原北條家の  
所領 役帳ハ河村彌百七十八貫五百六十文の内五十貫文江戸新倉とあれバ  
永祿より元龜天正の頃迄ハ河村氏此地の領主たりしと心得存貞ハ當寺第三世の住  
僧中々松岳存普右員如南禪師と号せ元龜二年辛未六月朔日ハ寂せし此人ハ  
谷原山長命密寺妙樂院と号し上練馬谷原邑あり 永祿二年小田原  
北條家の所領役

帳ハ石神井の内谷原在家岸分の 眞言宗中々本尊ハ藥師如來の  
地ト太田新六郎知行の中ニ加へり 像ト安置モ慈覺大師の作ナリ慶安四年辛卯慶弐阿闍

梨としへる本食の沙門當寺を閉基モ 阿闍梨ハ伊豆國の産北條早雲  
長氏の曾孫中々増島氏あり

俗稱ハ勘解由重明といふ天正中北條氏規ハ屬一豆州韭山の城ハ龍居モ北條  
家滅せの後此地ハ退居し農民トナリ後其弟左内重國の子新七郎重俊に  
家を譲り入道深衣の身トあり慶弐と改め室を儲け蓮中庵と号せ元和  
二年三月十一日ハ遷化せ時ハ年八十餘歳なり

觀音堂 本堂の西ありひたりと云々天照春日ハ幡の三神をあらめまつり當寺の鎮護  
廟トモ寛永十七年の九月長谷の小池坊秀弐僧正當寺と長命寺と号けら慶安  
元年の冬 台命あり觀音供養の料トて若干の田園を附しあり

鐘 同所あり銘文ハ  
當寺定昌師撰也

大師堂 本堂の西北數百歩あり是ト興の院と稱モ今本堂より大師堂より  
大 同ハ廻廊とまうく其廊中五百羅漢の小像ト安置せり此興の院ト  
大 紀州野山大師入定之地勢ト模擬せり堂前ハ意燈堂あり又ハ廟像  
地ト同ハ前庭あり左右ハ七松植六地蔵等の石像其形ハ石燈籠ハ五輪の  
塔ト増島氏累世の墳墓ト並ハ建て又堂の四隅ハ五重の宝塔立十三佛十五  
石像等の類ハ累々ト野山の規制トあり三松の松ト稱するものあり一ハ  
今ハ枯失し樹林鬱蒼 弘法大師の法影を當寺開山慶弐阿闍

梨感得の靈像なり

寺記云開山慶弐阿闍梨紀州高野山入りより五穀を断本  
實を食ひ阿觀禪念をありけり一二年あり一夜大師夢に

去く曰く我肯諸國化度の時濱岐國ありく自像を作ると云々  
其像ハ今同國多渡郡劍の山といへる地の人家ト存せり汝ガ本國

我山ト遠く急ぎゆく彼像を得汝ガ舊里ト安置し此山ト摸く  
あふ恭詣なりけり婦女子等のあふ結縁まへし然時を吾山ト

登る等しけり云々遂ハ阿闍梨其地ト至りて靈像を



感得一奮里小一字を營く是を安置しなる當寺阿闍梨化  
寂の後も志を繼其子重俊新荷土を催し工商をうけが  
諸堂を營紀州高野山大師入定の地勢を摸擬して永く衆生  
化縁の佛場となせしありしを世に東高野山又新當寺  
とも唱へしを重俊の嗣平太夫重辰より諸堂舎と修復を  
其季子幼より三室を信し九歳の時より列髪得度  
住職し正僧正任を學業あつた勝まじあり  
當寺昔ハ東光觀照等の子院ありてまづ諸堂舎輪煥せし  
覺を並べ實野山の傍をかせしもの年や火災不罹して徑  
營悉く烏有とありり依元祿中再建ありしとも曰觀復ま  
りありしを今ハ其十ヶ一と存するもの

龜頂山三寶寺 密衆院と号を上石神井村ありしを真言宗の道場  
して頗大刹あり法印權大僧都幸尊應永元年甲戌に創建  
たりと往古ハ勅願の地あり故勅書數通と藏を以慶長十一

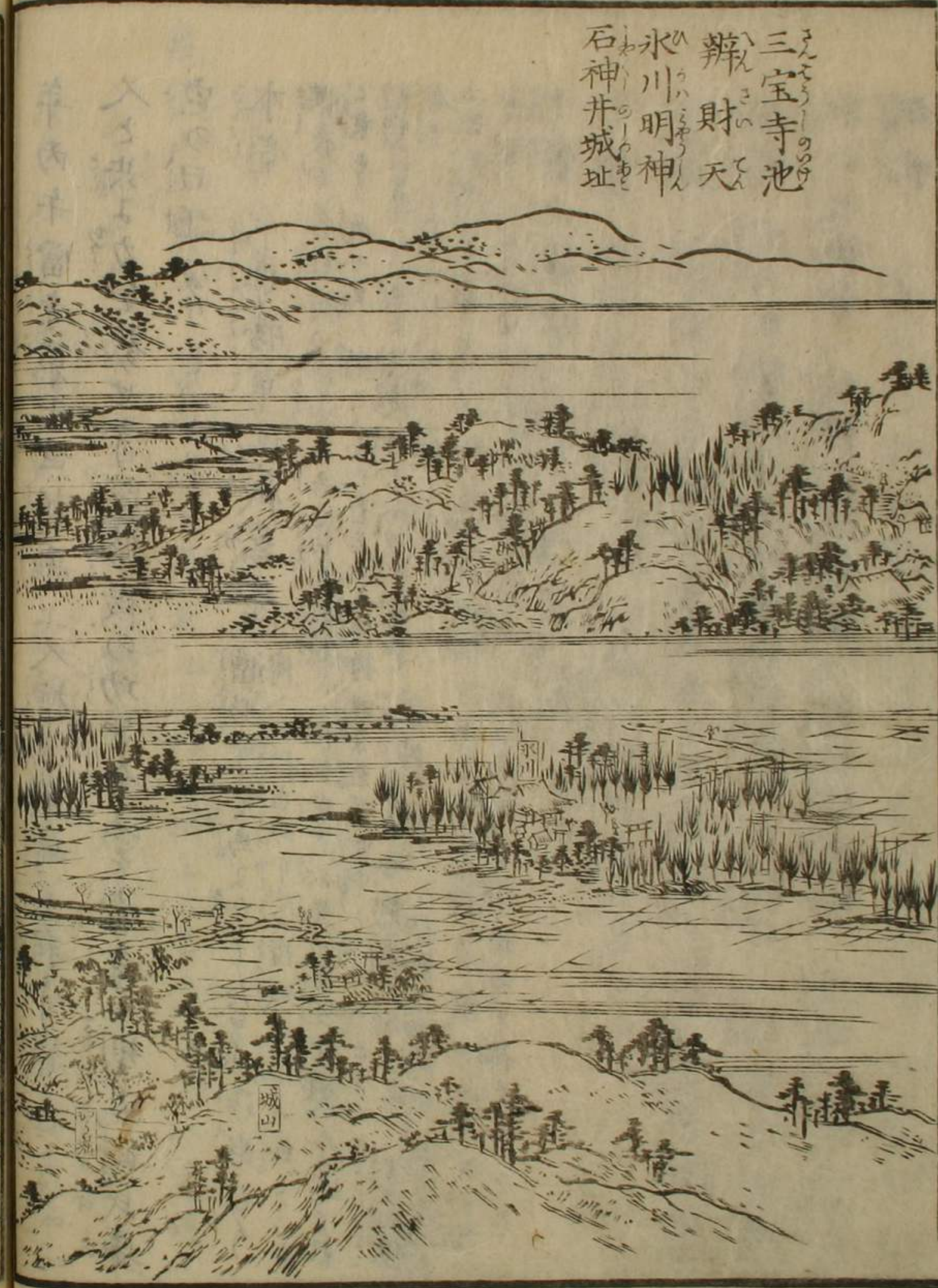
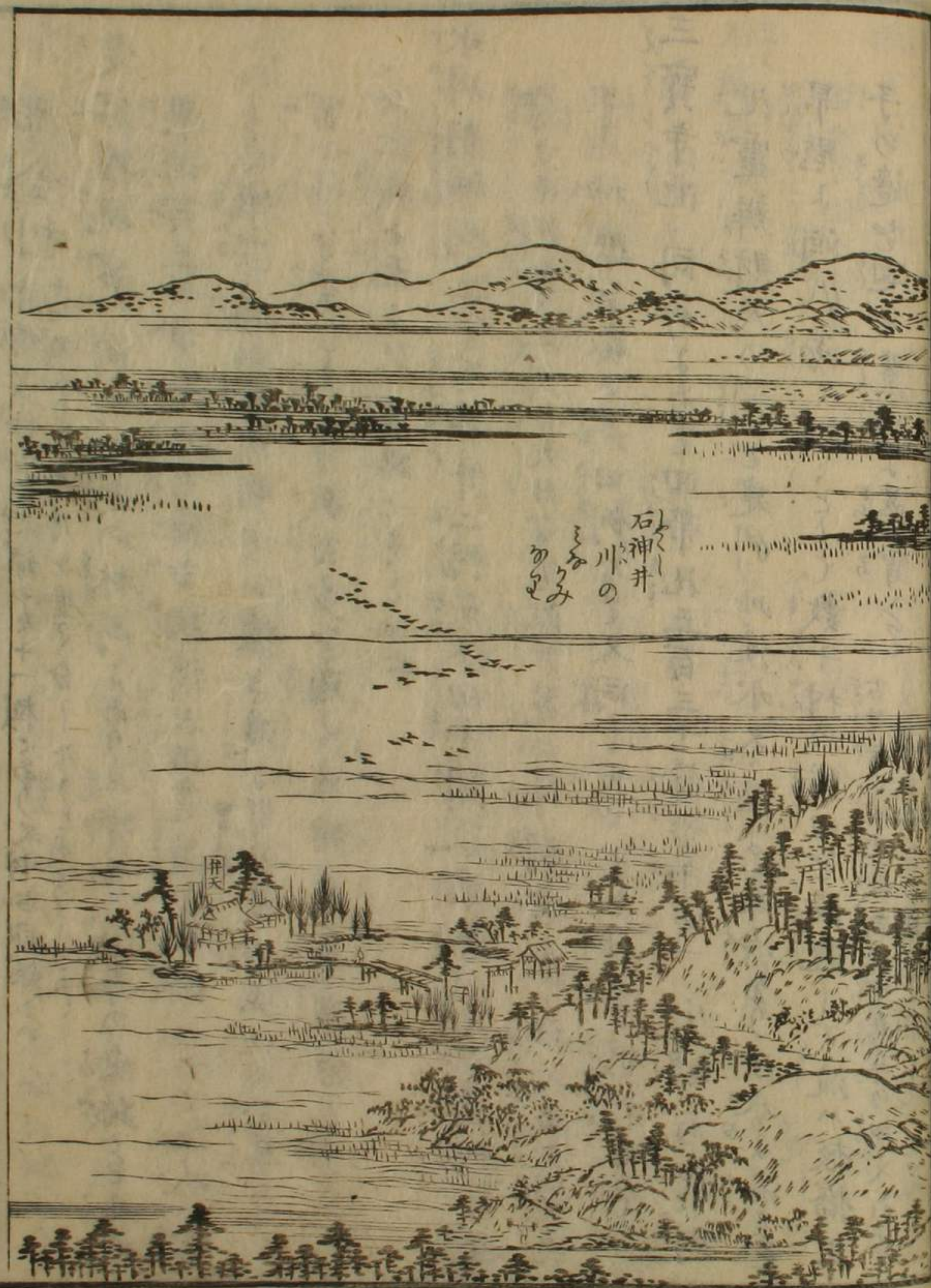
年丙午當寺第十世賴融上人檀主尾崎出羽守資忠といひる  
人と共よ力を勤せ寺院修復の功を全しを當寺ハ則尾崎氏第  
宅の旧趾なりといへし

本堂 本尊勝軍地藏菩薩 傳形馬に乘したる影なり  
其夜なる住持の夢中よ告て曰く我願くハ化を垂せ六趣の衆生を救はんといふこれ  
と乘する所の馬ハ猶く小止むと云く住持曉に至り堂中に入り拜せり小止むと云く  
彫造しなかり旧古の馬は三三回其福とありしを消し故に火消梅荷と稱するといへり  
日先狐鳴く寺院を廻り三三回其福とありしを消し故に火消梅荷と稱するといへり

千體地藏堂 表門の左ハ幡宮 同ト右  
寺寶 後奈良院勅書一通 正親町院勅宣一通  
小田原北條家氏秀證文 當寺弟七世尊海法印大僧正官勅許之  
證狀 同ハ世賢珍法印權僧正官勅許之證狀 同當寺住職  
勅許之倫旨 北條氏秀制札 同ト松制札 同岡入道江雪老  
制札

勅許之倫旨 北條氏秀制札 同ト松制札 同岡入道江雪老  
制札







佛舍利 寺僧の往古の記録を十一粒とあり又神古目録のハ

愛宕権現宮 同所西南の林岡にあり三寶寺本尊の垂跡を其地

東西百五十歩南北百餘歩相傳太田道灌の城跡なりと土人の字

城山と唱ふ前小關川を懐き後蓮井を負ふ北小阜あり

富士峰を望む南の方數百歩を過ぐ直塘あり道灌塘と号く之

云江城に至るは直路と云と云

氷川明神祠 上下石神井二村及び田中開谷原等以上五箇村の鎮

宇とて例祭九月十九日なり江戸芝の神明宮より社人巫女等来

てて神樂を奏て是旧例なり又同日廿日ありて神事修行せり

三寶寺池 同所ありて回帶凡五百三十餘歩中一小嶼あり則

池靈辨財天の祠を建り此池水冬温夏冷あり洪水は溢るを

早魁は洞流湯汗として數十村の耕田を浸漑下流は板橋王

子の邊を廻り荒川は落會へり

照日塚 同所あり昔光相傳當寺開山曾在京の頃八月十五夜雲上座外侍

此塚に倭人感ありて照日上人の号を賜ふと云

石神井城址三寶寺の池の傍にあり其地北に池水を帯びり大手と稱

するを水田ありて左右は空塹の形今猶存せり文明中豊島氏

此城に住と云

或人云豊島家譜に豊島三郎兵衛泰友の子三郎兵衛入道泰景

の跡を継ぎ武蔵國足立郡新倉豊島五郎を領し石神井の城に住り

下は載たり如く文明九年四月十八日太田道灌の命で築城せり

北條家の臣太田新六郎石神井の地を領し

石神井明神祠 石神井村にあり三寶院奉祀を神體ハ一顆の靈石あり

往昔井を穿とて其土中より是を得たりと云

依石神井の地名あり起り

練馬城址 上練馬村愛染院の側にあり豊島氏某が居城の地なり



石神井神明祠



一とひひは、先石神井の城跡の条下と合せ、永祿の癸卯、北田原北条家の  
 新も徳馬と領する由北条家の分限帳より、豊前方の地を所領の中へ又金曾木  
 のる人の所領のうちに豊島清光寺分練馬あり、同書は鳴津孫四郎と  
 鎌倉大草紙曰、文明九年正月十九日の夜、頭定憲房定正三人小勢  
 めを叶あしと上杉方申合上野へ打越、大勢を催し、景春を退治  
 せし、太田道真と殿中、利根川を渡り、那波の莊へ引退、景春  
 一味の族を武州豊島郡住人豊島勘解由左衛門尉同弟平左衛門  
 尉石神井の城練馬の城を取立、江戸河越の通路を取切云、又同書  
 曰、文明九年四月十三日、道灌江戸より打て出、豊島平右衛門尉が平  
 塚の城を取巻、城外を放火して歸り、所より豊島が兄の勘解由  
 左衛門を頼り、間石神井の城練馬の兩城より出攻来り、太田  
 道灌上杉刑部少輔千葉自胤以下、江古田原沼袋と云所、馳向ひ  
 合戦し、敵ハ豊島平左衛門尉を初と、板橋赤塚以下百五十人  
 討死、同十四日、石神井の城へ押寄、責られ、降参し、同月十八日、小



罷出對面まらふのせうめん 要害破却やうがい 却志せきし 由申よしまう 又敵對またたきあひ の様子ようす よんえ  
くまは攻落せめ す云い

立野たちの 舊跡ふるあと 今指所いまさしどころ 一かゞととせども新座郡あたらしく 郡ぐん 屬ぞく 引又村ひきまたむら の南みなみ に

隣となり 是こゝ 辭村ことばむら と稱なづか 地ち 是こゝ 是こゝ 是こゝ 其その 舊跡ふるあと なるん  
自らみづか 古名ふるな をうか 中ちゆう 古こ 至いた りて又また あり

多おほ 知し 多おほ 天てん と精洲しやうしゆう 字な 今いま 館たか 柳やなぎ 野の 土人つちびと 云い 黒馬川くろまがは といふと中ちゆう 狹せま 梁瀬りやうせ

川か 白子しろこ の邊へり 追お の地ち 古ふる の牧野まき の旧跡ふるあと ありと云い 依よ 考かん 考かん 考かん

其その 地ち 水濱みづはら 勢せい 尤なほ 馬ま を牧まか 便たやす 土人つちびと の説せつ 頗おほ 擡た ぬ

似に 都みやこ 荒あ 等ら の郡ぐん 又また 大江戸おほやま の西にし の方かた 地ち 練馬ねりま 竹馬たけま 澤内さわうち 牧まき

馬ま 引ひ 馬ま 多おほ 今いま 馬ま 多おほ 馬ま 引ひ 澤さわ 駒こま 林はやし 野の 牧まき 今いま 野の 馬ま 等ら の地名ちやうな 多おほ 多おほ

牧野まきの 因よ 澄あ 拾芥抄しやくがいせう 曰い 年中ちゆうねん 行事部かうじぶ  
八月はつがつ 二十日にじゅうにち 牽武蔵けんぶさう 小野この 御馬ごま 中略ちゆうりやく 二十五日にじゅうごにち 牽武蔵けんぶさう

立野馬たちのま 同書曰どうしよい 牧名まきのな 石川いしかわ 田比たひ 立野たちの 小野この 秩父ちちぶ 已上武蔵いじやうぶさう 云い

公事こうじ 根元ねもと 曰い 八月はつがつ 廿日にじゅうにち 武蔵國ぶさうのくに 小野この 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

後撰集ごせんしゆ 蕪う 捕と 朝あ 左ひだり 近ちか 以も 持も 今いま 武蔵ぶさう 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

新勅撰しんしやくせん 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

續千載つづせんざい 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

續後拾遺つづごしゆい 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

夫本そのもと 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

同どう 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

同どう 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

伊平家奇合いへいけあきあひ 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

古今六帖きんこんりくてつ 曰い 秋あき 野の 之の 御馬ごま 四十足しじゅうしそく をひく 其外そのほか 秩父ちちぶ の御馬ごま

貫之つらゆき 有重ありしげ 通平とほへい 公朝こうてう 新院しんいん 入道にゅうだう 太政大臣たいていだいじん 冷泉れいせん 藤原ふじうら 忠房ちゆうぼう 信實しんじつ



膝折里 新座郡に屬す江戸より河越へ至るは街道中々白子より  
行程一里驛站あり所澤よりを良し當りて其間三里あり  
北条家の分限は六郷殿所領と  
あつて中々川越内藤折上貫文とあり  
例の御成と云ふ里より市をへるをきりてかりて休む  
田國雜記

商人をのりてきりて孫の市は所澤を渡りてあり  
此和哥は脚氣と譯せられ一家言或は家言と作すと正字とを此地の農家  
古来より飯器を収めるの具なりと云禮記の註に箸ハ食を盛の器なりと云ふ  
脇に合ハ茶碗を入る具とを道與准后の詠ハ膝折といふをきりてあり  
家言を脚氣と云ふをきりて秀句あり

宗岡宿 引又の宿より北の方内川といふを隔て向ふあり  
引又ハ新座此地ハ古の奥州街道中々其頃相州鎌倉への通路あり  
郡に入り今の中仙道上尾浦和等の地より入て宗岡引又及び野火留の南を  
折り清戸の邊より多摩郡の府中へかゝり今の大山通道といふを  
徑く鎌倉へハ引又とあり此地は用水あり引又の宿の中を流る内川の橋  
樋と通を室永の頃秋元侯川越を隔てり引又の宿と川を隔てり宗岡の地へ  
より引又の宿より其頃白井某ある人此樋の懸方を工夫なりて四十八段の用水を

たりといふ此故は土人字といふ  
つろは樋を稱せり  
田國雜記 引又の宿といふ所を通るをへりてあり  
夕煙あつて多摩をきりて孫の宿

内川 水源ハ多摩郡秩父郡等の山谷より發する所中々入間郡に  
入る川越の北を東流し引又と宗岡の西を梁瀬川の水と合して

内間木の南を流る荒川は會するをきりて内川と稱せり  
荒川ハ入間郡の北の隙を流る此川宗岡引又の間に至るを  
川ハ其南を流るゆゑは内川の号あり  
引又と十五間あり引又の方ハ船路運送の地中々

江戸迄凡九里計あり  
十玉院 南城山ハ幡寺と号し宗岡より十八町程を隔て西北の  
方下南畑村あり本山派の修験中々本尊不動明王立像一尺  
七寸脇士二童子ハ一尺寸ありて共智證大師の作りとあり  
此地ハ難  
田國雜記 引又の宿より其頃白井某ある人此樋の懸方を工夫なりて四十八段の用水を  
單正戦死の傍北條家より此地を賜りてありと云ふ此單正ハ藩り



宗岡内川

伊予波通此地の領主  
 又此の地を  
 岡の地を  
 通農神の  
 助とせし  
 項四十八段  
 掛りけあり  
 かりけあり  
 かりけあり

田園雜記  
 此の岡と  
 つらつらと  
 通りもへそ  
 なるたの



煙とて

夕煙あ

とせたり

我

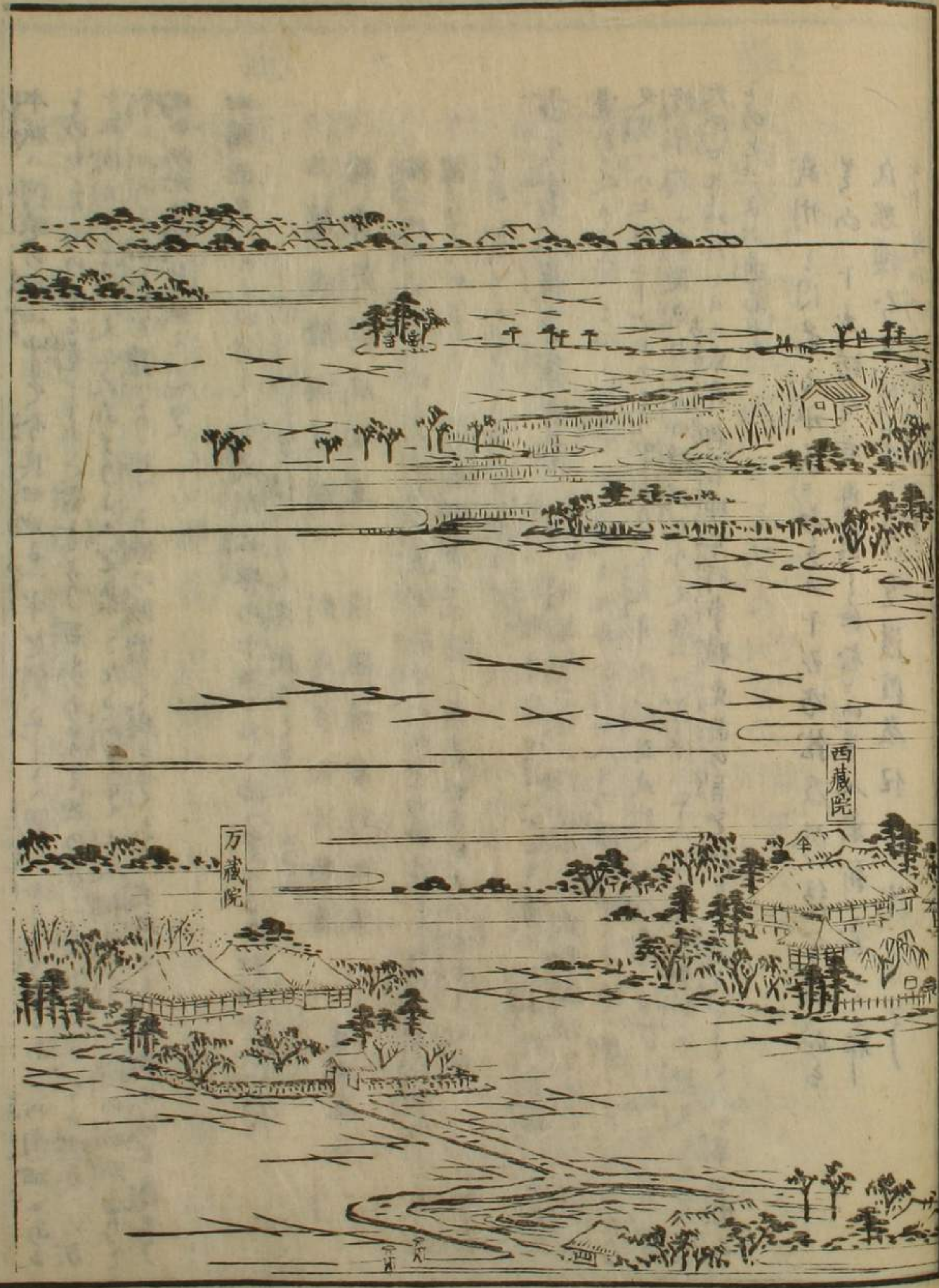
むの家の  
 宿

道與准石





十玉院  
西藏院  
万藏院



万藏院

西藏院



本城ハ河越の松山沖に今其地一字を創立し觀音寺と号するあり此南畑あり  
その地より七の跡と覺し一當寺あり百歩あり西の於に櫓下と号する地あり方  
十五間あり一丈三尺あり土を築きたる所あり土人相傳ふ古の櫓の跡ありと  
今此所を櫓倉と置り此下は櫓の跡なり残りあり其餘は空堀の形と存せり  
故に此地の字と城とあり

回國雜記 武州大塚の十五ヶ所へゆくは江山のくさひ

山攀峻險海波瀾 到處多其行路難  
踈屋終宵風雪底 凍雞嘆夢月西寒  
道興准后

古文書六通を蔵せり 其一ハ文明十二年七月二十七日清少納言行幸職の事申請  
違ふべくすと云く又其一ハ文明十九年正月十八日の證文中より上等一義あり  
又其一ハ七月二十六日と云く又其一ハ先年武州へ下向ありし節節小依  
修の字卷に准免ある由の證狀あり又其一ハ文祿三年八月十五日知修の證文に又其一ハ  
天正七年八月七日入東郡新倉郡年行事職免許の旨を記せし證文に又其一ハ  
とのと共六通あり

武州の内帯水子におよ十五坊及及び絶今叙びる  
其山一ト坊可有再興にむかひ入東新倉三郡  
氏照領分年行事職を管領院及任涉流文

天正七年庚辰二月三日 氏照判

難波田彈正舊館地 十五院の地を云 難波田今南波田或ハ南畑と作此地  
水損の患ありかりし終小官舟の 難波田彈正忠ハ扇谷上杉修理大夫  
免を得て文字とありたり

朝興の家人の同國松山の城を守りて天文十五年四月廿日  
河越の夜軍に燈明寺口あり古井へ墮入る横死せり 小田原記等  
今河越の市中に遊行二世上人真教坊開創せり古刹あり

東明寺と号する其田路なり燈と東とを考る 彈正忠の墳墓と稱  
墓碑は日蓮大居士とありて天正  
五年丁丑四月十六日と銘し

西蔵院 同所十五院より四町半西にあり本山派の修験中て東廓  
山觀音寺と号する正觀音ハ座像身長五寸八分弘法大師の彫造  
中て古大師此地に至る頃靈夢に依りて造らんと云

此堂宇ハ新造あり 應永年間古谷七郷の領主中筑後守  
今の製は異なり



資信といふ人 資信何人か知りたきべし 按東鑑建久六年乙卯三月十日未  
の人の中那珂中左衛門尉又同建長二年庚戌三月一日雨院機造宮没落の後  
當寺住僧を縁をあらむゆへに其嫡男資親當寺へ入る世を忍び  
入道一々行阿と号を資親中氏の祭祀絶んるを悲む其子  
某を修験の僧と託し号を如道と云則當寺に任せしむ此時より  
當寺ハ修験の法流となりしと云 其先ハ真言の  
古刹なりと云 志のりし一りし遠乃  
後天正以來四海承平の時に至り 御當家より観音面田の地を  
賜りし御祈禱を命せしむしと云りし寺僧云資信法号哉  
無寂大禪門と号を應永六年癸卯卒也 此地より二里を過りて  
古谷上郷村と  
云地ハ善神寺と号する禪林あり其寺境ハ中筑後守が居城の地なりしと云  
文字ハ磨滅し讀得べからず又同く傍ハ其家臣の碑と稱するも其  
ありし花庭大師康正三年と彫りありし不審と云ふ碑ハ  
百八燈供養古碑 高サ三尺七寸なり中筑後守一才餘の青石の  
一三三の種字ありし真言を刻し左右ハ孫子彦子  
一結衆等歌白文安二年乙丑十月とありし寺僧ハ資信菩提のふみ其氏族の  
輩の建つ所ありしと云ふも考へば

阿蘇明神祠 西蔵院より西南の方三丁計あり同所本山派修験  
萬蔵院奉祀の宮あり 萬蔵院ハ中筑後守の後裔  
權大僧都源海法印の中興なり 當社ハ中筑後守此  
産土神なりと云傳ふ當社梁牌の文は曰

永正元甲子年 奉造立阿蘇大明神本殿成就所  
七月大吉祥日 別當本山修験萬蔵院

同牌後面

野火留河越街道の立場中へ膝折驛より一里あまり西の方  
伊勢物語 昔男ありて此宿に宿むをたゞしむと云ふ一巻ありて  
いふは盗人ありて此宿の守人があはれをもちて盗人を  
あはれもちて火に焼くといふ事ありて此宿に宿むと云ふ

武義神ハその名をいふもその事もいふも其の事もいふも  
とありしを言てをむねと云ふ事ありしと云ふ事あり

田國雜記 此ありし小寺ありて其跡と云塚ありしハ其寺を  
焼せしふりし時火たかりしありしと云ふ事あり

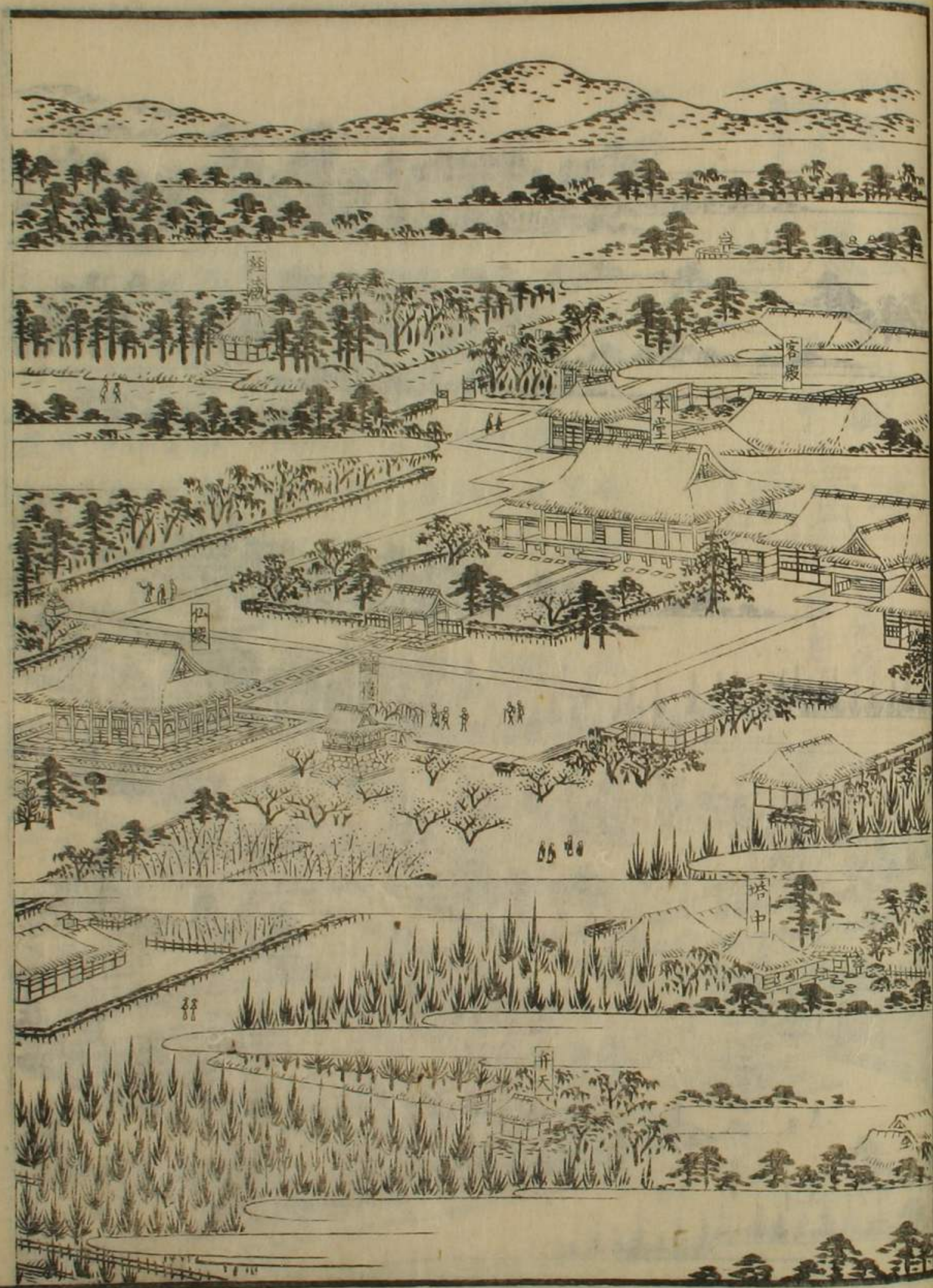




平林寺  
大門

より此塚とのひとと名つけしと云ふの人もあり  
 傳ふもた  
 道真  
 推后  
 按之昔ハ又田とのひく原野ハ火を放ち草を焼く肥し種を下まを焼畑  
 としひひりあひ今杖父郡地ハ信州等ハ焼跡蕎麥とゆふものありハ則是  
 たりまを其大の盛あふ至りてハ人家ハあふりてハ野火の恐あふハ堤又ハ塚  
 林寺境内ハ九十九塚業平塚ハと稱せしものありも同ハなごハなご  
 金鳳山平林禪寺 養心院と号野火留街道より八町程東あり花浴  
 妙心寺派の禪林なり古ハ大徳寺開山ハ石室善玖大和尚  
 の法嗣康應元年己巳中興ハ雪堂大和尚と号元和九年  
 九月二十五日寂云 足立郡岩附ありしを寛文三年  
 此地ハ岩附ありし今金重村及ハ寮舎四宇あり  
 佛殿本尊釋迦如来此佛殿ハ岩附より  
 山門佛殿の前あり樓上ハ十六阿羅漢の水像を置き  
 此山門ハ岩附ありしを移し建すと云





平林寺



大寺吉巷鐘猶耳天兆  
 日本後國武州崎西郡岩山莊金鳳山平林禪  
 千戈健產無催粥華之鱒茲郡吾河山檀越參州橋頭郡  
 良參同雄源家英氏族有大孝心所感命治鐘亮祥  
 壽與鳳山其功德也堆山其孝心感積岳餘慶  
 寄數家門之榮者幾萬年矣祝銘曰孫則億  
 以清淨鮮外明月寺門前檀越不孤德兒孫億  
 根清淨鮮外明月寺門前檀越不孤德兒孫億  
 天曙樓閣外明月寺門前檀越不孤德兒孫億  
 年時元和九年癸亥九月十日  
 寺者同州在岩城城西寬  
 載記予延寶甲寅夏  
 外微火鐘樓尋燿之冬遂  
 幕病譜天和壬戌之冬遂  
 全該舊制初度之願輪永  
 切兼担越初度之願輪永

鐘銘

同額  
石川文政  
筆あり

金鳳坐

惣門額  
同筆

凌雲閣

客殿額  
同筆

平林禪寺

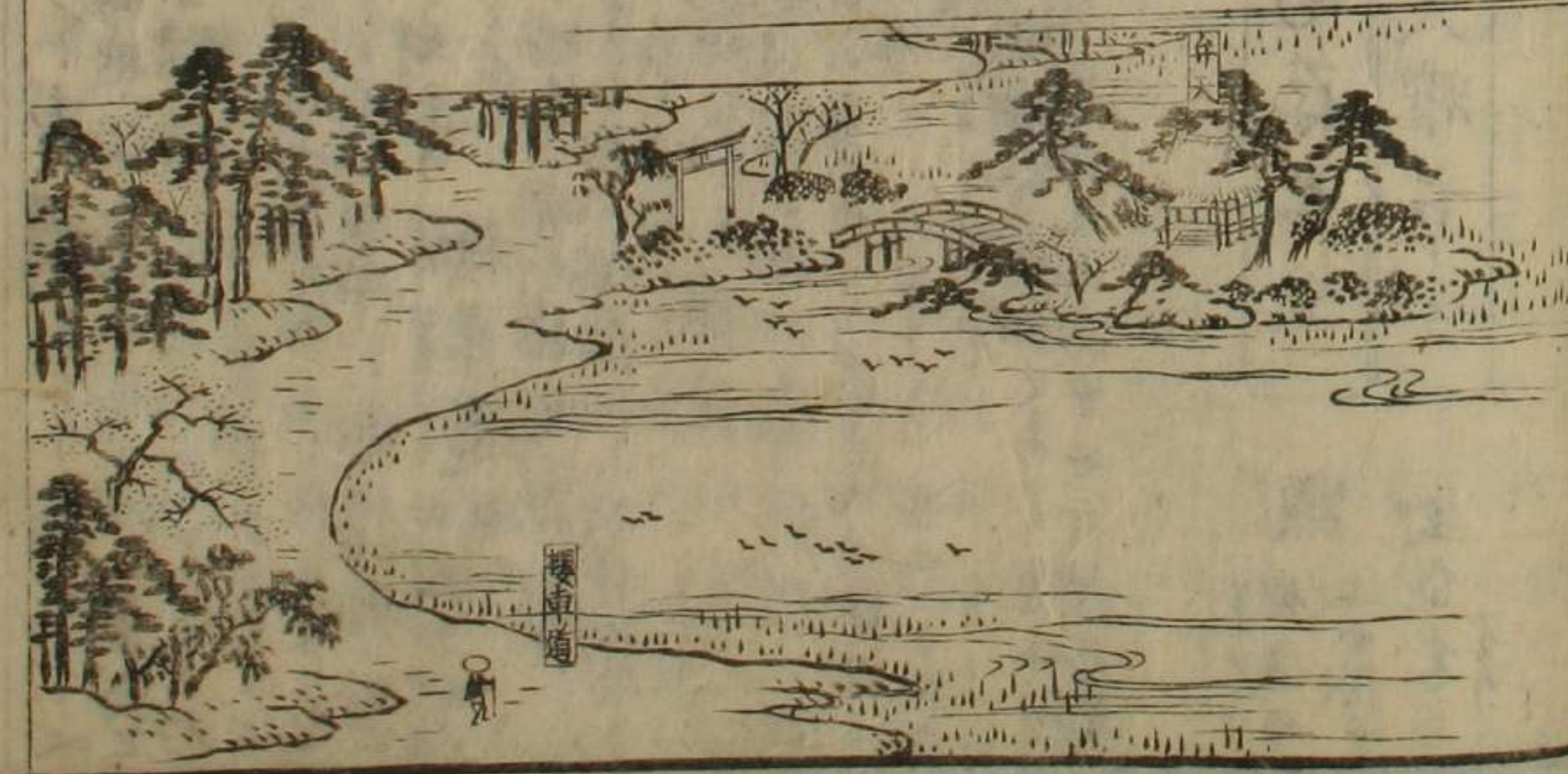
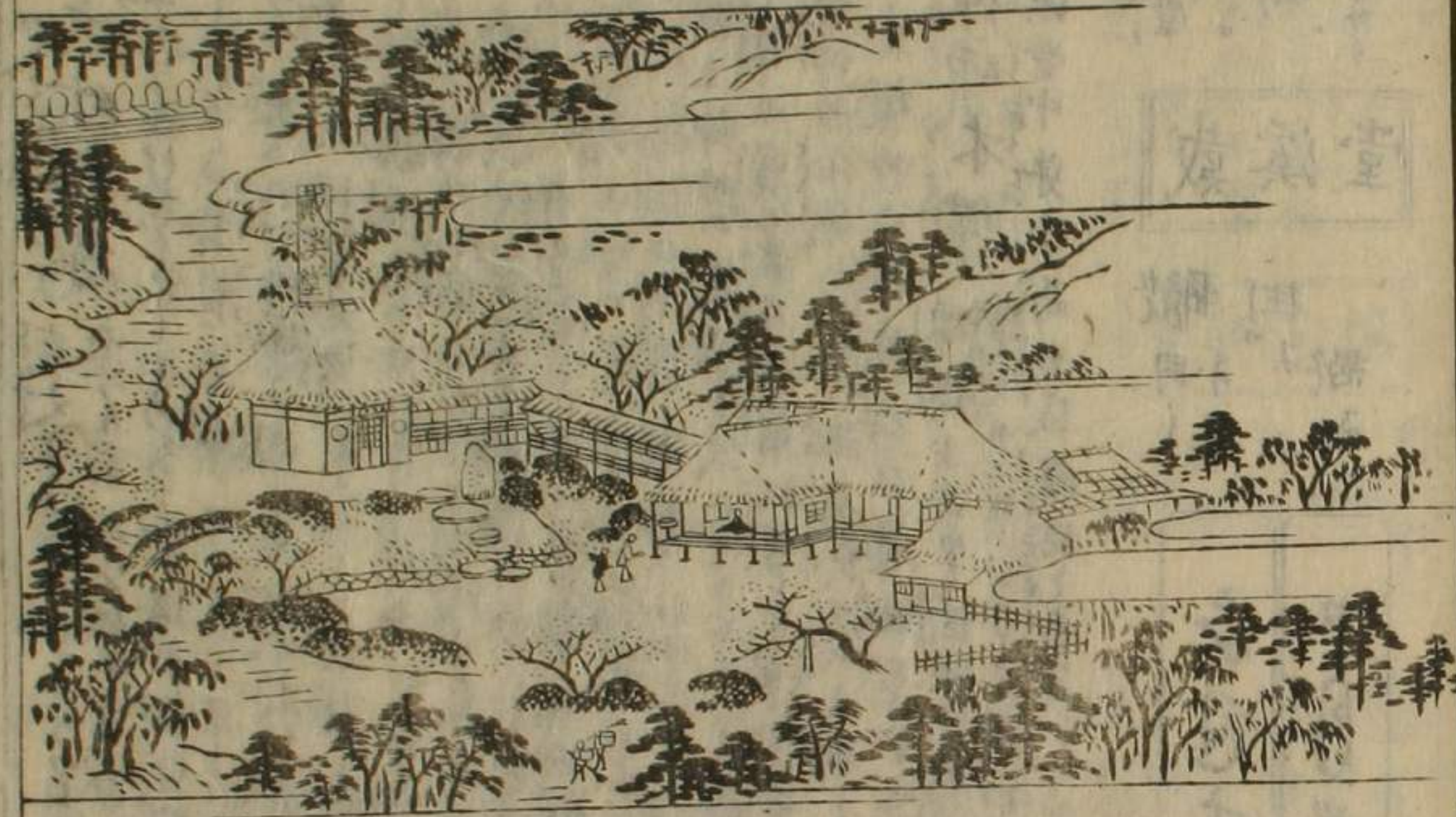
鐘樓  
額近水臺

佛殿の前あり  
松平豆州侯筆





戴溪堂  
櫻車道



當寺開山石室和尚住山之頃鑄治せ  
 江那藤原中務正行慶雲禪寺比立至光小谷野三郎左衛門尉季善奉行大檀  
 左近將監朝貫保屋山城守修理の逆井尾張守必添常宗とあり志一開東  
 共上亂慶戸の場よあるが観音の像と好む堂の維持退隱の地あり岡の上は  
 養心庵あり内よの観音の像と好む堂の維持退隱の地あり岡の上は

云劫石有消日洪者無盡時遠也大也  
 武州新座郡野二火年留莊金鳳山平林禪寺  
 吾鳳山嘗有梵鐘一口其型小而且有蒙隙樓未  
 復之觀茲有知庫全德徹志深檀興慨不巳客  
 華鯨與樓不同時提圓成山野銘詞者頌存雲加護賤數刀  
 之梵音大而器頻圓成山野銘詞者頌存雲加護賤數刀  
 維時寬延三年龍右工武  
 西江山比東東嚴禪海誌焉



此の古九十九塚 於てより五十歩を隔てて後山の嶺の中より高き古の  
 碑あり 九十九塚 なるより土と築き上は雑樹繁茂をば 業平塚 九十九塚より北  
 三十九歩あり 櫻車道 平林寺境内  
 後世好事の人の伊勢物語ゆづりて 櫻車道 平林寺境内  
 此の道路の両邊に櫻を栽たり 今老樹とせし地は 櫻車道 平林寺境内  
 辨財天宮 戴溪堂の北にあり 二百餘年あり 戴溪堂の北にあり  
 あり内は 戴溪堂の寶籠及ひ前札等を 戴溪堂の北にあり  
 置せり 戴溪堂の寶籠及ひ前札等を 戴溪堂の北にあり  
 ありとせり 戴溪堂の寶籠及ひ前札等を 戴溪堂の北にあり  
 獨立禪師本牌 像前より 戴溪堂の北にあり  
 祀于戴溪堂中弟子高玄公謹誌とあり

額 戴溪堂  
 戴溪堂の軒  
 老納書とあり

戴溪堂

聯 戴溪堂  
 掛は 戴溪堂

衣冠古園存君父  
 日月還天耀古今

額 戴溪堂  
 戴溪堂の軒  
 老納書とあり

元竺古先生

戴溪堂中  
 觀音大士扁額  
 享保元年丙申  
 七月 高玄公置

梅も昇主

同 戴溪堂  
 國師 普照

五夜禪燈三昧火  
 萬季藤几乙枝香

觀音の前  
 の左右に掲  
 たり天間  
 衲自題と

本牌 一 戴溪堂  
 門立 高玄公  
 師明 戴溪堂  
 其先 戴溪堂  
 匱父 戴溪堂  
 六産 戴溪堂  
 季二 戴溪堂  
 穎悟 戴溪堂  
 喜文 戴溪堂  
 朝棄 戴溪堂  
 未能 戴溪堂  
 頭坐 戴溪堂  
 題下 戴溪堂  
 襲人 戴溪堂  
 乃往 戴溪堂  
 瀟長 戴溪堂  
 癩水 戴溪堂  
 已語 戴溪堂  
 早溪 戴溪堂  
 春卷 戴溪堂  
 發晦 戴溪堂  
 行電 戴溪堂  
 三壯 戴溪堂  
 月有 戴溪堂  
 抵粵 戴溪堂  
 崎人 戴溪堂  
 時其 戴溪堂  
 兼招 戴溪堂  
 應同 戴溪堂  
 二持 戴溪堂  
 季海 戴溪堂  
 也快 戴溪堂



憤矣事未師崇初以相峰聯分重刹善師三臘抱集山更善十殊容  
之稍之芒書也七覆載禪芳支建昏之無月月素若侍師庵一七貌  
言有輩安賜左日蓋以師軒折也山以安朔遙懷于從呵托月十七生  
慷志悉得者奉也望至其鹵泓墾曰為像日奉負卷慧々未初七夏  
慨氣聯延旌師扁以卜老北委關金可之賜聘恩唯明而後六日臘  
不之翩至其像曰墻吉師之給曠鳳圖區殿書極哉護笑事日也一  
容存而於三以戴壁架默隅庖塾寺也願見夙矣吾送和曰也一  
刊以去此季奠溪匪梁雲有福樹曰距言命夜積師靈尚即示十  
者效抵而坐之堂日翼和隙元之平都數入戒愧乘骨便今寂九尺  
凶其今自關扁中而然尚地旱松林鹵椽翰途悒世定起甚前一  
慮觀吾明也題位告僚合即不杉前吾之林越悒業於終廢一實  
數已止於噫梅供竣東議可竭導伊十構顧庚莫已黃為時日寬  
十伏一世時花範時僅可就入水豆里獨謂寅可四槩下候請文  
扁念子乎不關金正三之而各玉守外有身二與十山火答千二  
今吾遺回俱主大德搃乃起硬川源武源已月計七有聞曰呆  
略師耳意霄乃士丙間尤聶之控君州為充直詎謂於外於午尚  
表一季舊上普導申方工住其之信地政選抵謂於外於午尚  
而生又勤恩照師三之獲持子紆綱有聞其武已茲老聖打於  
出忠老共之國歸月菲木雲院迴之鉅而奈城丑空人壽三廣

他筆非時後特然尚猶如嘗礙時假司才戊流夢落立國甲七軒長  
凍書病健省就而開如書謂其寬還源之戌亞之々號帥命月懷崎  
折曰何啖覲山往山鍾法濟緣文崎正德九剛同山天座有普戴奉  
梅鑿事猶國中不豐王正人術三庚重之月曆塵袍下下兌照子行  
花々藥壯師起憚之餘廣蹟通物道癸入師出國未並踵間添矢師公正  
影塵為季途靜喘壽益古菩廣卯關住於師八擔雙人即心應負述  
接々倒至此疾為出東亦神薩治三幻錫時東月儒衷師李脫聘笈請  
却傷卧稍作憇力師絕氣本不月寄事革朝從釋殊謂臘白東向留  
江海匡林減而息備邀品含行視八山阻之武侍博可棄月用渡日馳  
南邨吟衆回之至駕也芒應方日三不右戒普決啣儒八畢大東書  
白不我勸遣所豐虛乙獲機活也載果執宰門典而歸日殘振不上  
魂殘自服侍自主半已其施潑嗣出萬政官掌籍無釋也喘法歸乞  
書夢娛藥徒扁感座春片用施後關治源長書識可酬諱狀威之師  
罷統忽不祖曰師以雪紙祖藥居止二君者記者計同曰求師歌便  
蓋空朝聽命白老待峰隻老圍不幾季信莫萬云者一性出嘆次住  
屯軒起曰代雲而師即字活國擇罹己綱不治慧青性易家季季有  
而啾坐報屯室精輒非珍路稱地灾亥暨嘆元地天風字乃傘甲濮  
逝任索身平啟勤翩和襲至神無發病有師牽之白光獨歸六午澹



陳平為用慕否於如踏遭之哉挾藩地身與突天被茨極之統之  
身跡所盛芒之耶聲師海時言只甥大中與高忽若乎上乎亂昭其  
非因親固吾誠信詩所終亂非此子創妄作法四妖重土冕御下之成足高  
漢作災謂師方可推後功方不己字父孫背弟義亂相王姚濛氏體盛乎誇皇  
誓曰其安事仰而世名外苟之入私繁萬凶無斯親合廣豈也衣德中今帝  
不心矣以乞仰能事其安私繁萬凶無斯親合廣豈也衣德中今帝  
事然勤之朝凡之不介其乃世兄端逆作日力者以大沈乎皇有下  
照求之或鉅讀士少卓地天橫逆而天孫理推以元獸變日永禮至尊  
然弗勸之名文能以而風復公光兼殺統當之僧月夜見成尊中德  
不克之曰山能無為其歷屈論矣兼運命元明統現形於四乎世世  
避將奚碩無一莫能情古其嗶呼哉詔天挾奉天僧也敢也高化明  
文自不德慨原及逸而後呼師侃天長燕照也敢也高化明  
之乃勉文雅以也播磨以也  
繁據而雅以也播磨以也  
恭生他篇歌者播磨以也

多士弄夫河山清霄撫  
顛預其顏醉爾遺範後人  
逸環金鳳攸止碧水潺湲  
追攀天閣武藏沃墊

享保三季戊戌四月穀旦

弟子高松季江直芙蓉拜建

當寺の境内を周流する所の水ハ兼應元年野火留新田墾闢の  
時伊豆守松平信綱朝臣二里餘り南の方小川村の地より  
多磨川の水を分るこふ引しつとつり

野火留用水を宗岡より引  
多ハ秋元侯川越を領せり

安松山長源禪寺同一西の方安松材ふあは洞家の禪林ありく八王

子の乾晨寺に属せし閑山ハ傑用禪師徳英大和尚と号す

主申七月閑基を英岩道春居士と称せり

精舎中々大石道春公の草創ありとありしが大石氏本尊釋迦如来

座像七八寸計の本佛なり

作者洋當寺は北条氏照の靈牌を称



古色の文字

飽間齊藤氏戦死墓碑 野口村の中西宿徳藏寺と号する禪院の

後園 濟家の禪宗より江戸赤坂の種徳寺に属せり相傳へて永祿 竹藪

中ノ建あり 膠あり又傍に永春庵とある草庵あり方充和尚と云へる

沙門中興せり今ハ徳藏寺の寺境に 迂々々々ハ草庵の岩ありのこれ

高廿五尺計  
碑面三尺五寸餘  
幅一尺五寸計

元弘三年五月十五日 致  
元弘三年五月十五日 致

飽間齊藤三郎藤原盛貞生年並勸進三郎佛  
於武州府中五月十五日討死  
元弘三年五月十五日 致

同孫七家行廿三回死飽間孫三郎  
窓長廿五於相州村圍十日討死 執筆扁阿弥陀佛

飽間氏の墓碑ハ實ハ五百年の蘚苔を帶るといへども三士の雄名を  
今ハ埋まれば千載不朽なり 執筆扁阿弥陀佛が書ハ暗ハ元人の  
骨法あるを以て普く風流好古の徒此地に至り 標揚をふとの

少

按元弘三年ハ 光嚴帝の正慶二年癸酉なり此年後醍醐天皇隱岐國を遷して  
歸洛し重祚の後ハ慶の年号を用ひらば元弘三年と此年新田  
義貞朝臣相模入道と七と同年五月十五日武州府中の分倍河原へ押寄入道  
舎弟四郎左近大夫入道慧性と合戦を義貞打負く終は堀兼とて引退く由太  
平記より考へ太平記ハ此人の名を注せされども  
此日はあやしく討死せり此碑はよりの明

將軍塚 徳藏寺より四五町を隔て北の方狭山の嶺東の嶺の終る所

の塚上は老松一株雜樹は交り繁茂せり 此地ハ余村及び余川

口村に属す 元弘三年癸酉五月新田左中将義貞朝臣上州の笠掛野を

此此地ハ屯一歩を隔て東西の塚を築き旗を建て其備へを

越後信濃の勢を集め竟朝敵を平けたるハ一奮跡なるを

土人其武功を慕ひ將軍塚と唱ふ 西の塚上は義貞朝臣の靈を祀りたる

狭山の池 箱根ヶ崎驛舎の西北の脊に存する所の池水を狭山ヶ池の

舊跡とす然も箱根ヶ崎にありたる所の箱の池と云ハ狭山の池と稱

する所のハ狭山の麓にありて一所をさすハ今も亦も二所を





將軍塚  
徳藏寺









久米川



田園雜記

久米川と云所  
をへり里の影く  
みハ井なるとも  
まへへたは川  
と流れて終つら  
ひまふとあんまう  
しんれハ

里へのあく  
ゆへられよ  
ありなハ  
こゆり  
もそ  
とろ

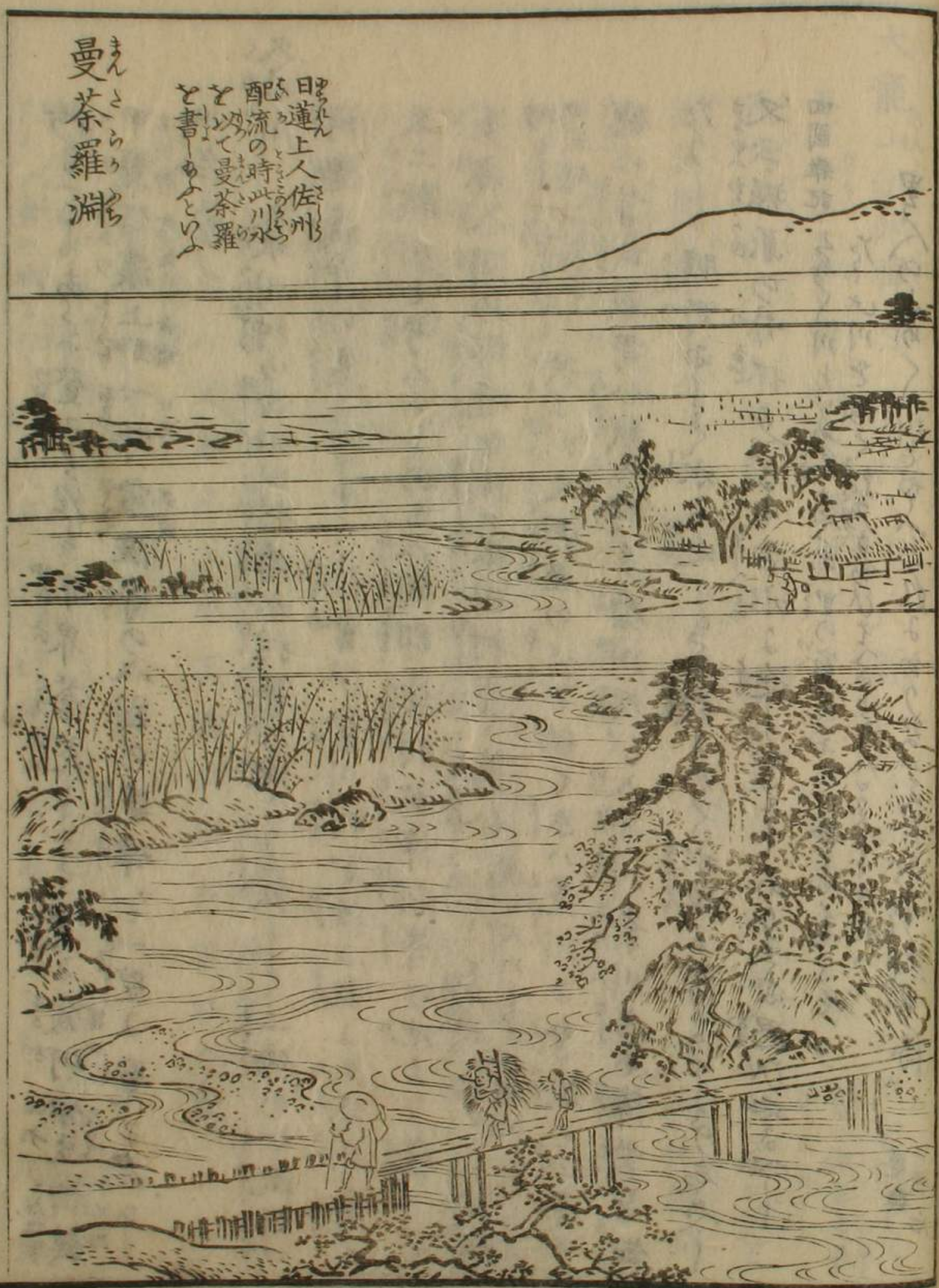
道與推后





曼茶羅淵

日蓮上人佐州  
配流の時此川水  
と必て曼茶羅  
と書しむといふ



持妙院



此名あり  
甲斐信濃上野下野常陸等の八國の遠嶂と一望を覽る故なり  
此名あり

久米川 久米川村の西回田村清水村等の地より發し二條の小流野口

村徳藏寺の裏の方より落會ひ糸川村を流る故より久米川と号す

又二瀬川と号するものも入間郡糸村秋津村等の地より發し

多麻入間の郡境を流久米川村より落合

四五間より共引又新座の辺を経て未ハ荒川は會流を正慶寺

徳の昔武藏野合戦の時多磨川及び入間川糸川多小陣營を假

たりし曠野ゆゑ水乏き故にかく水辺にたりしを

又云堀兼の井杯よるも古水よるも古水よるもありさぬ思ひあるべし

田國雜記 ちかく川といふ所を里の家々井を掘りて

里人のちかく川といふれよりなるハ水りせむ

大龍山永源禪寺 糸村よりあり八國山より北の方小川の流を隔て

五丁沙ふあり曹洞派の禪林中より龍谷竜隱寺に屬す

天文年間大石氏開創する所の精舎ゆゑ開基大石氏法名を

英崑衛俊大居士と号 安松の長源寺は衛俊を

と号 北条氏照の舎弟ありと云 道春は作るハ洪かまへし

行基大士の作ありといふ 本尊釋尊ハ二尺をかり此座像ゆゑ

當寺開基大石氏靈牌 牌面右より透岳宗関大居士中より英崑衛俊大居士左

當寺鐘の銘は奉る大石速江入道が

洪鐘 當寺の住持雪巖和尚

武州入東郡久米郷 大龍山永源禪寺

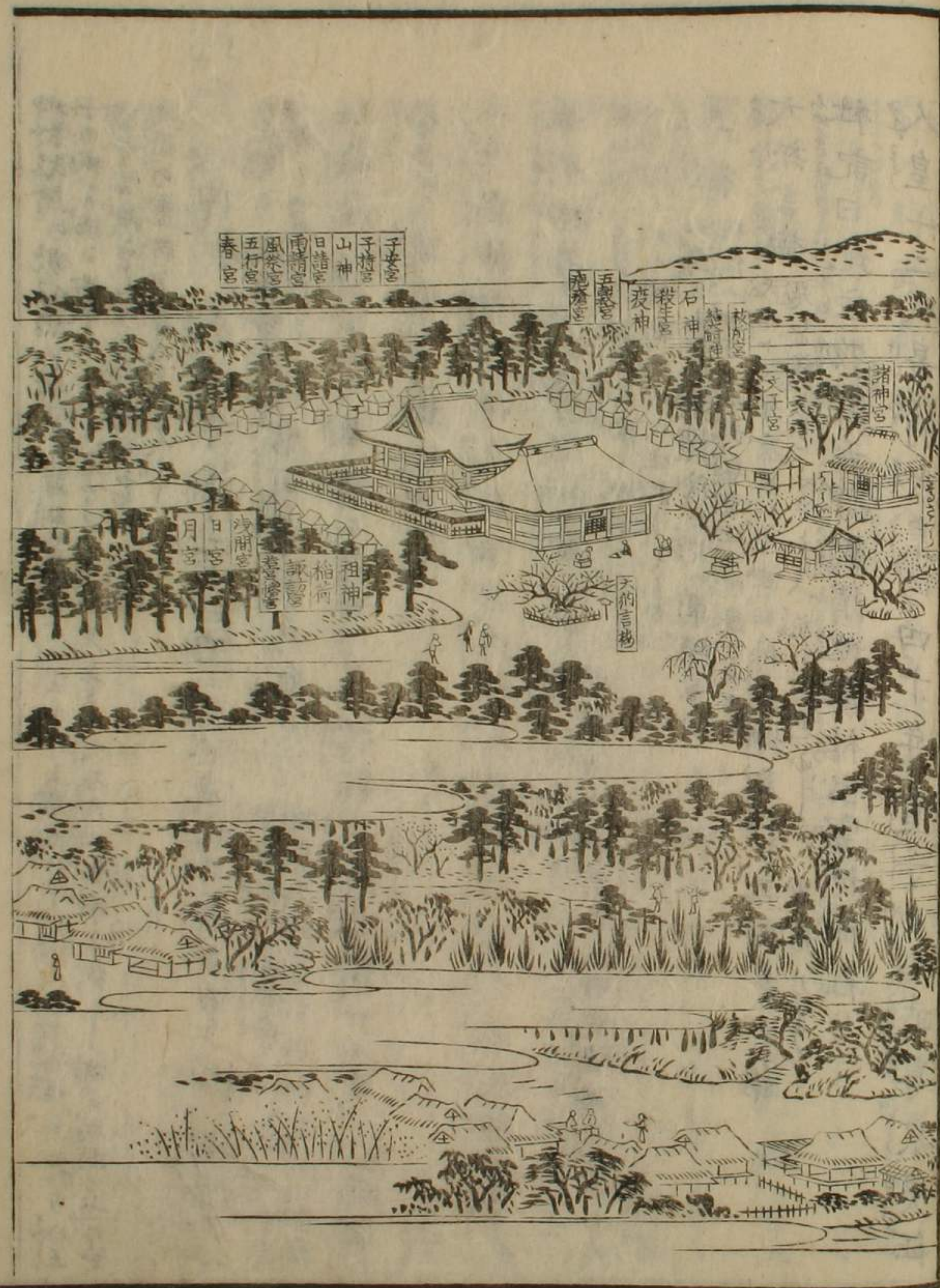
住持雪心叟融立 本願檀那大石速江入道

直山道守 應永廿九年九月初吉日

按文明の頃大石駿河入道二宮の城に住し天文の頃上杉家の老臣大石源左衛門尉

定重戸倉の城に住し又其父定文定書定文を滝山の城にありしなり然るは此定文の後







北条氏康の脱走を撃つに苗田を継ぎ同國由井に居城せしむ氏康後本姓より八王子の城に移る此等の人の祖考あり依考より大石氏北条家より縁あり故に氏康の合葬を當寺に居らしめ又長源寺に氏康の靈柩を置くあり

北野天神社 永源寺より二十三丁西の方北野郷にあり 花浴北野天神を祭る此号あり

又北野と武蔵野の大宮司栗原氏奉祀を相傳天兒屋根命二十六代大中臣朝臣今麻呂の長男多美丸の苗裔

北野といふなり 北野といふなり 北野といふなり 北野といふなり

每歲正月十七日奉射二月廿一日八物部天神祭同廿五日八天満宮の祭あり遠近より群衆せし

本社祭神物部神出雲伊波比神國渭地祇神天満天神竈手差

原明神等の四神を相慶とせ 續日本紀神護景雲二年戊申秋七月壬午武蔵國入間郡の人物部直廣成等六人

姓を賜りて入間の宿禰と稱せしとあり

尊櫻 社前あり枝葉繁茂を花ハ軍辨あり

大納言梅 天正十八年庚寅加州相利家卿當社を再興あり

社記曰地主物部天神國渭地祇社出雲祝神社ハ

人皇十二代景行天皇の四十年皇孫日本武尊東夷征

討の時武蔵野に入賜あり諸軍大に渴を

彌兼井といふを是なり此所より 時よ老翁忽然とて来り

尊と導く此地に至らば清泉ありて楮軍の勞を救ひ

翁の歸るを尊其時天神地祇劍の義神を祭るハ戦ひ

自伏し奉るとなり 物部天神國渭地祇社出雲祝神社等ハ是を武尊

是なりとの佩せる草薙の劍ハ元出雲國八岐の大蛇の 同四十一年辛亥正月

尾より此を以て出雲祝神社と稱せしとあり

十七日土人集り方八丁の地ハ三神の社檀を經營せ 奉射の式あり

此遺風 同年二月二十一日遷宮あり 毎歲正月十七日

欽明天皇の十二年辛未十一月十五日武蔵野小手差原の靈神

及び日本武尊を合祭し小手指明神と崇む又一條院乃

御宇菅原相五世の孫菅原修成武蔵國の國主なり時管公の

靈ルある後長徳元年乙未二月二十五日勅許ありて花浴北野

天満宮を始り關東に移り奉らる依坂東第一北野天神也



稱しなる源義家朝臣奥州の朝敵追討の時も宿願ふらて  
惣社建立あり其後建久六年乙卯九月十九日源頼朝卿正  
八幡宮一字を勸請ありてまへて本宮九社共ニ修造せられ  
社領二百貫文の地を寄附し給ふ此時式内の諸神勸請神宮中  
稱正先大宮司上毛野元重の時まへに  
領地二千貫文ありしをまへて時ニ建武延元の争戦ニ社頭兵變ニ罹り  
夫より後大ニ荒廢せり然レ延文元年丙申尊氏將軍諸社を  
建立し多ひしが又應仁の火ニ破れしを天正十八年庚寅加州の  
大守利家卿再興あり殊ニ忝也御當家ニ於テ沙崇敬此  
餘ニ社領を添へせし慶長十三年戊申沙造堂あり大久保  
石見守  
是と司るありし武門擁護の沙祈禱怠りしなり  
慶安二年中も又四十二石の  
社領を増しめらる  
源氏満證状一通社司栗原氏の家ニ蔵せ  
斯文左のごとく

同國山口郷内北野宮殿 虫食  
并田畠在家 虫食  
在別命虫食

右任先例致沙法可非多々状也件  
寛永十年八月廿五日

大共御督源 虫食 在判

按此古文書源氏満なり虫食其名ありしは其花押を以て  
大石源左衛門古文書 同家蔵也  
其文左の如し

北野宮神主職 虫食 在判  
兼其甚く是の如し

天文十一年二月十五日

道俊在判

北野宮 神主殿

按不道俊ハ大石源左衛門の如しあり兼村の永源寺及び安松の長源寺の条下ハ  
大石源左衛門の如しあり此二通の外ハ小田原北条家の朱印あり其文を  
こゝに附せり



小手差原北野神社より西北の方十三四町を隔て河越入間川等の邊  
をへく小手指原と号せり 豊島郡下練馬村は小手指原の舊地也其由  
其土人云傳ふと之を證するなり新井白石先生  
云く小手指原ハ北野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふと今ハ壘田を  
傳ふ七百餘石の地となりと云々

新葉集  
むさしの原へ打懸く小手指原とつりあひありぬ  
むさしをいへりしはむさしひつりあひありぬ

中務卿  
宗良親王

太平記曰正平七年 北朝の文和 紀元 閏二月二十日の辰に武蔵野  
の小手差原へ打臨み一方の大將は新田武蔵守義宗五萬餘  
騎と五ふ分ち一方の中道より寄られ去程小新田  
二萬餘騎四方六里を扣へり一方ハ脇屋左衛門佐義治を大將  
て二萬餘騎是も五箇所を陣と張敵小手指原より聞えられ  
將軍十萬餘騎と五ふ分ち中道より寄られ去程小新田  
足利両家の軍勢二十萬騎小手指差原に打臨敵三聲時を作とバ

御方も三度時の聲を合せて上ハ三十三天迄も響き下ハ金輪際迄  
聞ゆるんと震し 略中 饗庭の命鶴生年十八歳容貌無雙は兒  
なるが今日花一揆の大將なるとバ殊更花を以て出立花一揆真先  
小懸ゆると兒玉黨七十餘騎と戦ひ搦立ち一返も返さず  
その引程と有るれ將軍は十萬餘騎混引し引立く曾て  
後を顧む新田武蔵守義宗旗より先に進むて天下の爲ゆを  
朝敵なり我爲ふ親の敵に只今尊氏が頭を取る軍門は曝さむ  
むバ何の時をう期をべきとく自餘の敵共の南北へ分れ引をバ  
少も目おかけむ只二引両の大旗の引おけ何く迄も追蒐なふ  
引も策を奉追も逸足を出せば小手指差原より石濱まで坂東道已ふ  
四十六里を片時が間ぬ追付く將軍石濱を打渡り入る時 略中  
近習の侍共二十餘騎返し合せ追蒐敵の河中迄渡懸くゆ  
引組く討死し其間將軍急を遁も向の岸へわけ上り入



落行敵ハ三萬餘騎追蒐る敵ハ五百餘騎河の向此岸高く屏  
風を立てたるが如くあるハ數萬騎の敵返し合せく此を先途と支  
なり日已酉の下より成る河の淵瀬も見え分む新田武藏守義  
宗續の渡も小舟もせず跡も續く御方ハな安うぬ者哉と  
身を嚙く本陣へと引返さる新田武藏守將軍を討漏しぬ今日ハ  
日已暮ぬもバ勢を集く明日石濱へ寄むと小手差原へ打  
兵衛佐敷何所より扣へぬと相令の兵共は問多ハ兵衛佐敷と  
脇屋殿とを一所より扣へく御渡を候つるが仁本殿も打負て東の方へ  
落させぬ候へともを答るるさそ爰小見えぬも蕪ハ敵を御方  
を問多ハ此辺御方ハ一騎も候まは是ハ仁本殿兄弟の勢を白  
旗一揆の者共が焼くる蕪あそを候らん小勢あそ此辺は御座候をん  
みハ御方と覚え候へバ夜小紛もく苗吹峠の方へ打越させぬ候て  
越後信濃勢を待調へらも重て御合戦候りと申るハ武藏守

暫思案して々々此義然るべしとて苗吹峠ハつごとと問て夜中の  
落れぬ云云以上其要

太平記は新田義宗朝臣軍の御軍を遣く小差原より石濱迄坂東道四十六里を片  
時が間に進出たりとあるは隅田川の石濱はあそ御軍の津より川上  
牛渡と唱ふる地其旧地なる由土人云々依擬は牛濱の地も多麻川を隔て向  
於西南の地を二の宮と号く他壁中へ太平記は河の向の岸より扇風を立てるがや  
とのみ地勢相うるなり又同書は苗吹峠等吹峠とも書く宇須伊と訓し上野と信濃の  
國東とを布を記者の誤あり當國地企郡御軍澤村との地ハ古田村御軍東征の時  
陣營と布を記し旧跡中へ土人其地を封し嚴祠を營し將軍大権現と崇めぬ候  
かとハ入間川の辺より上州への通路あり今市宿の西にあり其後  
澤と前を當く苗吹峠と号する山あり義貞朝臣分倍の軍破まるとは上州信州の國界  
ぬとび入間川へ陣を引し其夜苗吹峠へ渡りぬ候と云ふハ上州信州の國界  
あそ入間川へ上信の國境ハ約程二十里あり其夜中容易至るべきと云ふハ入間川より  
此峠迄四里ありとありて其夜中も至りつべしと思はる

山口 觀音堂 北野村より西南の方半道をかりを隔て新堀村あり  
の方入間郡は接する地の惣名を山口と号す吾菴山金兼院真光寺と号真言  
土俗云此地ハ山口平内なること云人の城跡あり

宗 江戸大塚護國寺は屬せし弘法大師を以て開祖と稱す  
本堂本尊千手觀音 立像二尺三寸あり 脇士多聞天不動明王 兩像  
三尺あり行基大士の作なりとも  
或ハ同大士感得の靈像といひ入



山  
觀  
音







山  
口  
岡





額 圓通殿 根嶺大傳法院僧正八十八翁筆

影向加持水西谷ふあり 往古弘法大師一夏の間に千座の獲摩供修行を成し其地は清泉と求得らん志あり

大悲の影と拜し 其靈泉早懸おも固きやとあり一時有信の人此水に臨観て

琵琶島辨財天祠 千手谷の東口の地の中洲あり琵琶の形なる故号とす

二王門額 吾菴山 筑波山前護持院八十八翁權僧正光星筆

縁起曰往古聖武天皇の勅願ゆりて行基大士諸國遊化の初此地

地に至るふあり日既暮ぬ仍樹林の下に錫と掛通夜誦經禪觀を

深更小違ひて林間千手陀羅尼を誦する聲あり大士奇異の

思ひと祈り其辺を求めらる異香薫り靈光赫奕とて樹上に

輝き千手大悲の聖容忽然とて影向なり久し則曉を待て彼

靈樹を伐くとの拜する所の影を摸刻し永く度生のゆめ

あふ安置せし 此地千手谷と號す此樹は 其後弘仁年間弘法大師羽州湯殿山

行ひとせしと途ゆりて此地ふあり然る一人の老翁来り告て

曰く此山中は行基大士作る所の大悲の靈像ありととども人其靈

あふるをあらば我大徳の此地に至るを待て適に堂宇を営むと

云て後其翁が行方をあらば 此老翁地主權現とあり依大師山中入て

求めあふをくく翁が告ぐる所は千手大悲の像及び脇士多聞

不動等の二尊をも感得なりあひ一字の草堂を建立 當寺の權

其後弘安年間國中大小疫癘流行し死に至る者必く此時一人の

老僧ありて家毎ふ至り告て曰く吾菴よりき大悲の尊像たせ

多し来り祈る輩ハ病患悉く免るべし又吾庵をあらんとあふ

深夜山中光あり地に至るべしと云り里民其教をあふひ夜光と

標し此地に至り此靈像を拜し病を祈り大に靈驗とて

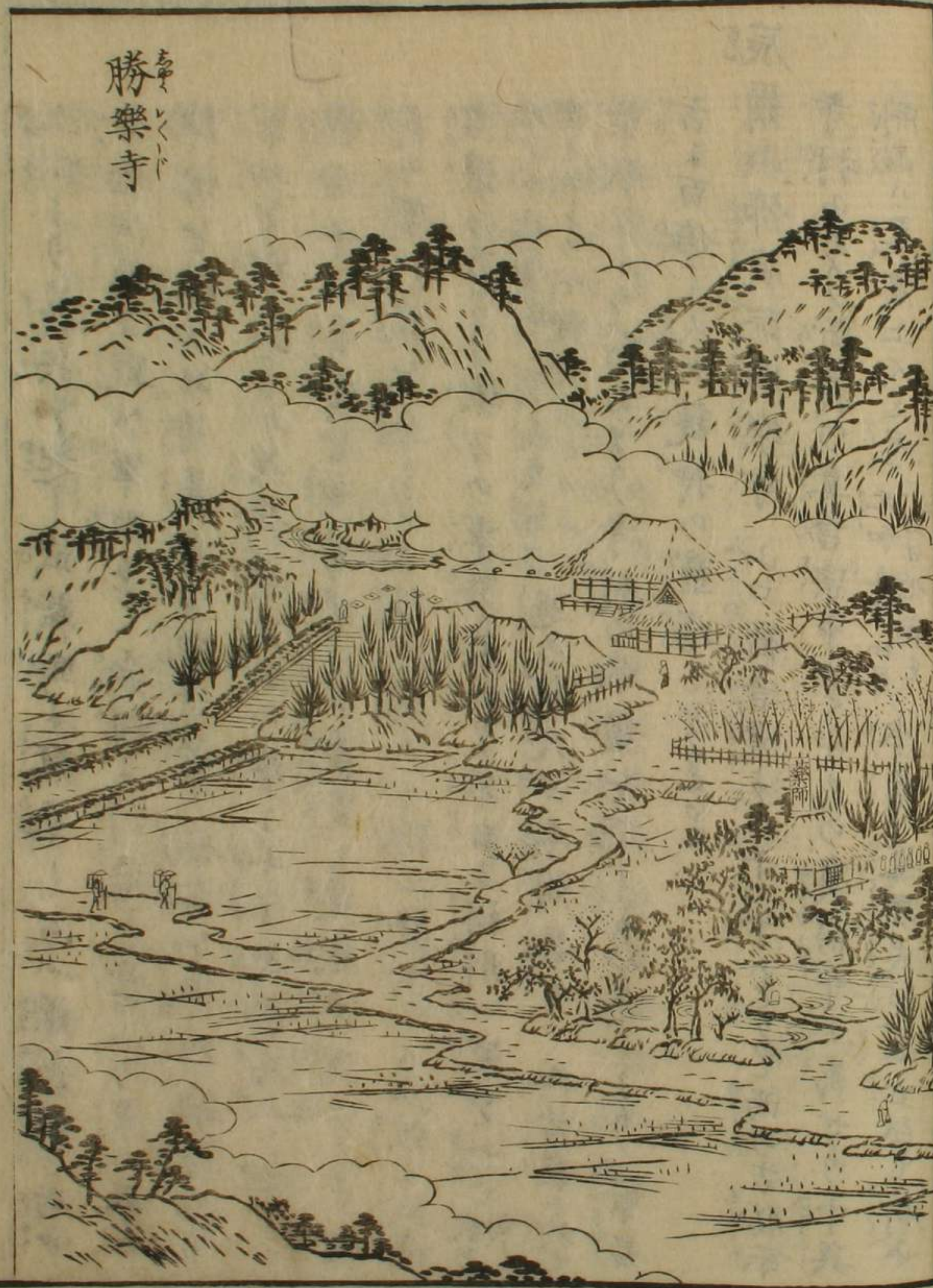
歡喜踊躍し諸人日夜絶む 老僧の言語を就く山を吾菴と号け大師

院と号く光明を放する 修禪の地を金剛衆嶺と稱せしを以て金來

地ハ山口の役手堂なり 又元弘三年癸酉の五月ハ新田左中将義貞朝臣



勝樂寺





上州より義兵を起し武蔵野に旗擧しあふ鎌倉勢と府中  
 分倍河原に戦ひ軍敗れて糸川に引退き當山の東の峯に  
 陣營を構ふ此時義貞公觀世音へ願書を捧朝敵退治の  
 軍功を祈らせし其夜義貞公の夢に千手大悲馬上に現し  
 親手は弓箭を与へ夢覺て後感悦淺く庭  
 前の櫻枝を策とす盟て關戸の陣に發向し然る越後  
 信濃の方より數万の軍勢差加る不日は相州一家を亡し  
 地を今將軍塚と号義貞誓の遙の後天正年間泰も 御當家  
 櫻と云との今猶榮ふとより 崇敬なりあまの寺封の朱璽を下し  
 古は百倍一人天護持の靈場となし  
 辰爾山佛藏院勝樂寺 山口觀音堂より十二丁をとり西の方勝樂  
 寺村あり新義の真言宗より中戸の真福寺に屬せり中興  
 開山は真惠上人と号 元和九年四月 本多ハ近頃火災に亡びて新  
 十四日化誕也

座像二尺をわりの十一面觀音を安置を此火災に仍て悉く日記  
 を亡たりとて草創の時世等詳ならず 中興上人と云  
 洪鐘 當寺大坊の前左の方あり銘文高麗郡とあり元禄年間災に罹  
 損しとて銘文の後再興の旨趣を注し添く改鑄とありと  
 其銘云く  
 武州高麗郡山口郷勝樂寺村奉新造立鐘銘曰  
 諸方空相 寂滅異名 常樂我淨 箇々圓成  
 奉日侍講供養 奉庚申講供養  
 奉念佛講供養 奉誘奉如供養  
 奉修山王七社大權現御宝前依 願主 藤原重信  
 辰爾山別當佛藏院勝樂寺大坊 住寺中興開闢 法印推大僧都  
 尊海上人 莫榮上人  
 延久三年辛亥九月十九日 開闢 莫宥順說  
 本願 二見相覺妙性  
 初誓  
 明曆三年丁酉九月吉辰 日敬白 御大工 推名兵庫頭吉繩



此寺境の地ハ入間郡ノ属シ再ビ按ニ高麗郡也勝樂寺ト号スル寺アリト後高麗山  
聖天院ト改ビ此寺ノ後ニ勝樂寺ト号スル寺アリト後高麗山  
七社権現宮 勝樂寺ヨリ百歩ノ東ノ方山ノ上ニあり山王二十一社ノ中ニ社ノ神ト  
古當社ノ一ノ鳥居ありト旧記ナリトハ今ハ毎歲九月十九日に祭禮修禱

開山塔 七社権現ノ後ニ開山塔ト稱スレドモ唯其唱ノりテ塔ノ形ト存スルニ  
當寺往古ハ大伽藍ヨリ鎌倉將軍家累世ノ祈願所トリ

と成リ其頃ニ十二員ノ坊舎ありト魏々たりト物換レ星移  
マシク今ハその名ノ存シク悉ク田園ノ字ニ残リ

對ニ其ノ稱ト見テ又大坊ノ西南堂地入トシテ所小古瓦ト穿ルニあり古伽藍ノ  
證ニ著シ又文永嘉元正等ノ古碑數枚ト存セリ

按ニ日本紀ハ敏達天皇元年壬辰夏四月高麗ノ使人來テ表疏ト上ル其表疏  
鳥羽ノ書リ諸ノ史ト召聚ヘテ讀シテ三日ニありト皆讀メテ其文字ト  
爰小船史ノ祖正辰爾ト云々トありト羽ト氣ト蒸ト昂トト羽ト羽ト其文字ト  
写シテ詳ニ讀ム當寺山号辰爾山ト稱スレドモ今ハ其古ノ遺蹟ナク

新堀玄蕃居住地 山口新堀ノ地ニ住セト云太田道灌ノ家臣ニ  
シテ江戸谷中ニ新堀ノ地ニ移住ト太田

家ノ傳々所ノ稻荷ノ神像ト以テ一社ト勸請ト今當寺ニ  
護法神トシテ天女稻荷ト稱スル玄蕃後小豊島ノ新堀ノ故住セト云

よリ此地中ニ新堀ノ号ありト云

山住彦三郎旧趾 七社権現ヨリ良ノ方三丁ヲわりテ隔々小岡ト

云土人ハ山住彦三郎某ノ城壘ノ跡ナリト云

此地小旧家十四五軒ありテ其中ニ見家ノ古文書及旗幕ノ

注文書等ト蔵スルモノあり

又此岡ノ根ニ諏訪ノ神祠ありト石劍ト神體トモ

其古文書曰

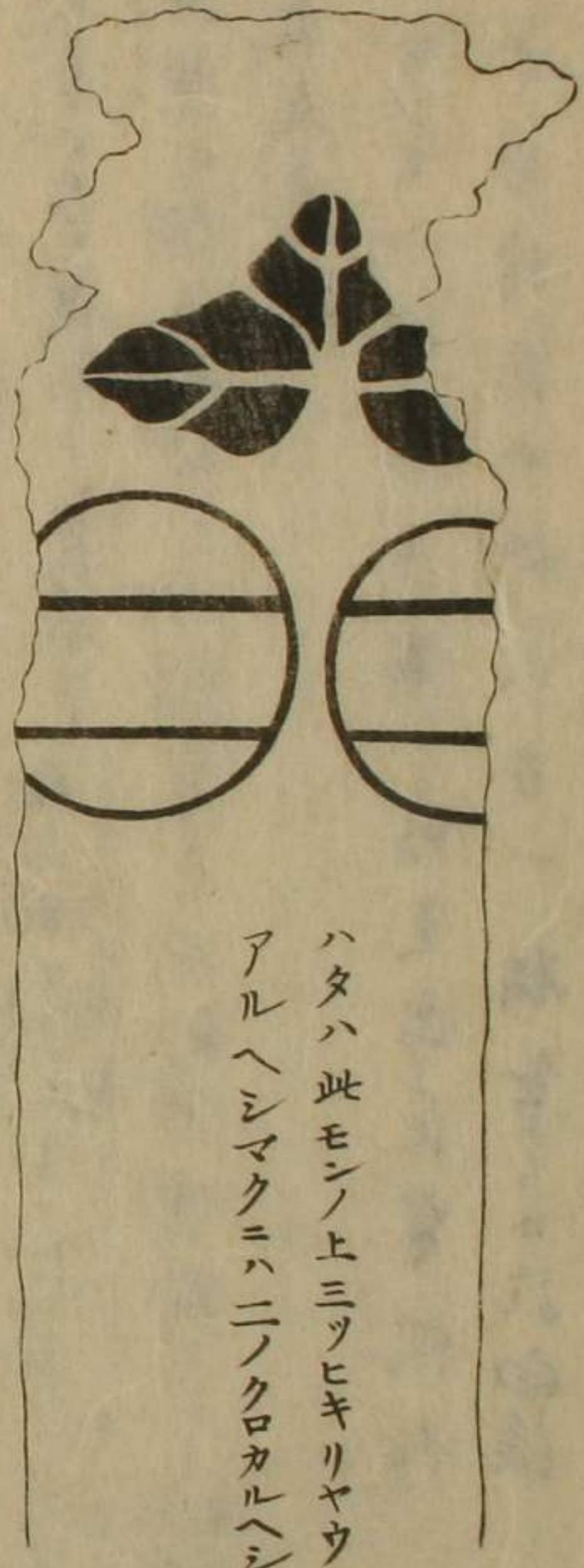
先日小室御所働之時迄也有能人  
中有神妙の仍大刀一腰を以て  
承のお掬着也状也件

十一月二日

空哲判



二見の壺



ハタハ此モンノ上ニツヒキリヤウ  
アルヘシマクニハ二ノクロカルヘシ

箱

按相州鎌倉松岡過去帳天文七年十月七日生實御所左兵衛督義明八正院  
空善道也汪たり空哲の二字を分て煙善道也とせしむ此の古文書  
義明の二見おぼしかりのあり花押を考ふる小義の字のやこれと  
義明の花押ハ花押義續花押義古押義等の書もこもを漏せ故考ふる  
所なく猶他日訂正せしむ  
箱根権現を以鎮守とする故箱根崎と稱し或ハ箱根崎と稱するなり此  
奥羽等の國ハ相州大山へ登らんとする輩色此ハ其頃ハ往來頗多  
難根権現を以鎮守とする故箱根崎と稱し或ハ箱根崎と稱するなり此

池

箱根崎は驛舎の西北數百歩あり  
此地ハ八王子より野州日光山  
の通路中して六七月の間ハ  
奥羽等の國ハ相州大山へ登らんとする輩色此ハ其頃ハ往來頗多  
難根権現を以鎮守とする故箱根崎と稱し或ハ箱根崎と稱するなり此  
今知るる古ハ池の周回三十丁ありありとあり今ハ新墾と  
悉く耕田となり又ハ林叢と變して徒ハ四形茂草地となり松  
風の響ハ波瀾よかると徒ハ其傍を存するもの  
此の祠と營建せり蕁菜と此地東北の岸頭より起る所の一峰を則  
此地の産とを佳味なり此地東北の岸頭より起る所の一峰を則  
狭山の首めり東に連るる凡三里餘  
池と土人狭山の池とも稱せり

堀兼井

河越の南二里餘を隔て堀兼村あり浅間の宮に  
傍ある小是を浅間堀兼と号せり  
此社前ハ古の淺倉街邊に  
行路あり今の宮ハ慶安中平豆州侯建立なり  
浅間の祠の左ハ四地を  
多り別當と慈雲庵と号河越高林院の掾なり  
中ハ方六尺なる石を以て井桁と半土中埋れしもの  
あつと堀兼の井と稱せり傍に往古川越秋元侯の家士岩田  
某建る所の碑あり高さ五尺餘其文左の如し



井の兼の堀



千載集  
むと  
の  
井の  
あるもの  
うれしく  
水の  
邊  
つとよ  
るり  
俊成





此四形之地所謂堀兼井之蹟也恐久而遂失其處  
因石井欄置中削碑而建其傍併以備後監  
里語堀而難得水故云尔兼通難未知只從俗耳  
宝永戊子年三月朔

十載集 法師見濕土泥決定知近水のうらと

宇治百首 此堀兼の井ありて水を導く水の邊のさしり

ひさしや堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

ひさしや堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

ひさしや堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

夫木 武藏なる堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

家集 今さら浅くも深しと増すよもの夏茶

拾玉集 今さら浅くも深しと増すよもの夏茶

連奇良材

人よよる堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

回國雜記 堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

竹をかきし堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

芳しれり堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

里人のあせと堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

北國紀行 堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

枕の草紙 堀兼の井は深くも深しと増すよもの夏茶

土人傳へ云往古日本武尊東征の時武蔵野水乏しく諸軍

渴及びびたれバ尊民を乞ふ此所彼所は井を堀らしつるは終に

水を得たれば龍神を命じて流を引おしりつるなり

按は平記に元弘三年五月十五日義貞武蔵野の戦ひに打負く堀兼と云ふ事あり  
引退くところ此地の地をとり又元和十三年の春光廣卿の死後堀兼と云ふ事あり  
端ありぬむは仙波の寺堂に云はかりし事此歳間堀兼の事あり其餘あり



来迎寺



堀魚の井と稱するものあり此地より六町半南の方より二十歩をうろの向産める地あり是とも堀魚の井と呼べども又北へ向村中堀魚の井と唱ふるあり七曲の井と号渡り六七歩あり是とも農家の傍あり土人おぼへ文永七年堀魚の井の古くは古ハ一村の人こころこ堀魚の井と稱すなりさとも後世井路崩れ掘り今ハ所々井とありけり此水と汲ひて飲めり年井の傍に雑樹繁茂して鬱蒼とす又其傍に文永文保寛正等古年号を刻せし古碑を存せり堀魚の井と稱すなり此水と汲ひて飲めり年等の地中ありといひ堀魚の井一所ありけり再び按て武蔵野の廣野なる古水と云ふは堀魚の井と堀魚の井と云ふも容易に水を得るなりはこれなり

還車阿弥陀如来 堀内村東光山来迎寺 二股海神 といへる曹洞派の  
 禪寺に安置せし本尊阿弥陀如来ハ立像三尺脇土観音勢至ハ  
 両像ハ長二尺ありて各佛工運慶の作なり  
 龍膽ハ世俗縁と云ふの題あり 相傳往古奥州伊達の秀衡佛工  
 運慶を以て一刃三礼ありて 弥陀観音勢至一光三尊の佛軀を  
 造りて點眼供養の日生身の如来現然とて来臨ゆりて  
 光明を放ち新佛と照しりて 新佛も又光明を放ちりて  
 とかりて其奇特世に著く遠近の道俗皈依渴仰せりて



車返の古事

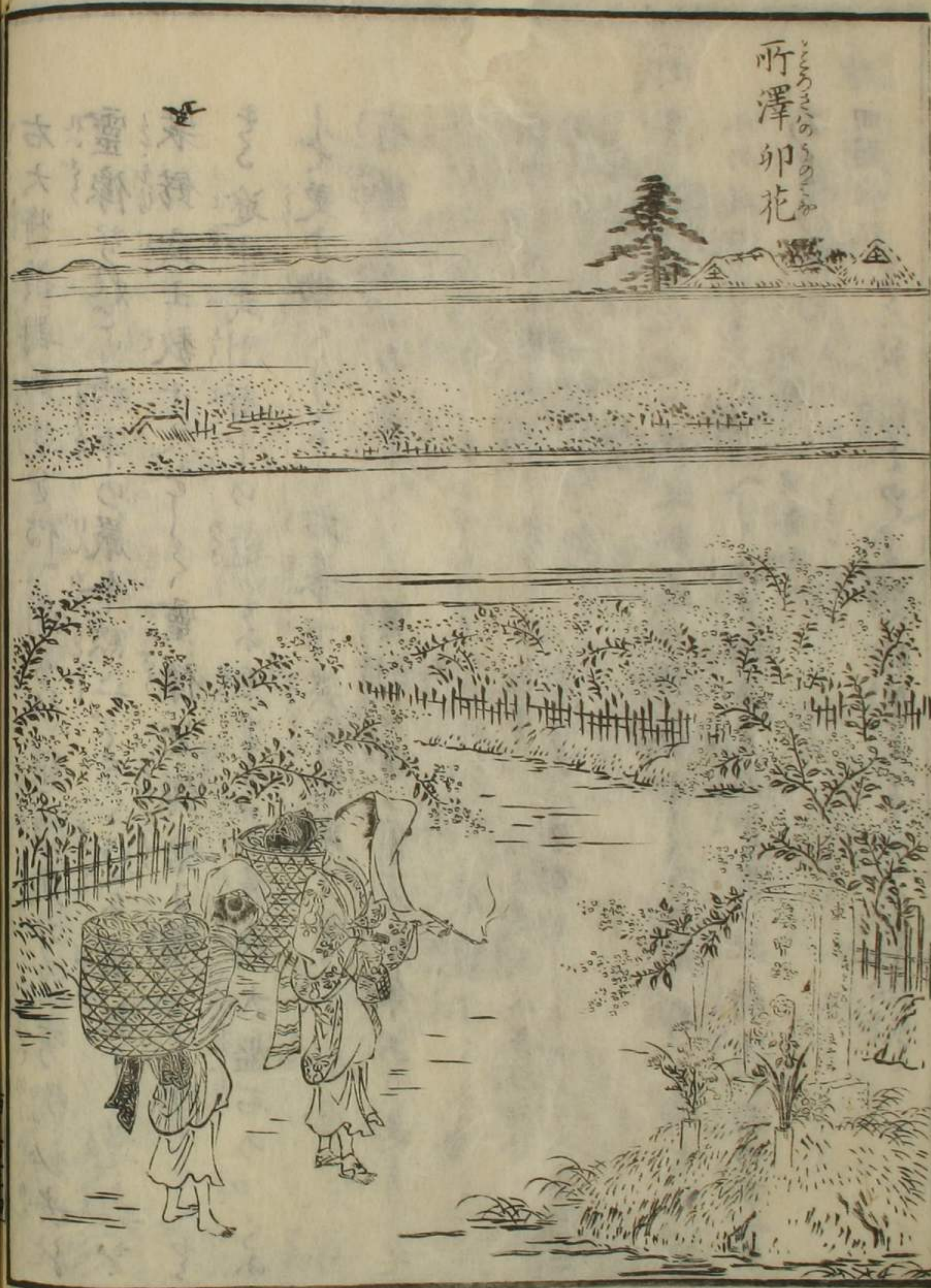


右大将頼朝卿是を傳へ聞ゆひ懇請頻なるも秀衡秘安に  
 靈像なれども將軍の嚴命黙止ぐく速小兼諾一蓮輿を  
 装飾武士数十人をく靈像と鎌倉に贈るもなげんや  
 途中武州府中の邊に至るも蓮輿大盤石の如くふ  
 しと更小動くもな右幕下其を聞しめると鎌倉の本尊  
 有縁の地よあざるへしと奥州に還るも由余あり是よりく  
 其地を車返村と稱せしむるも  
 堀の内村小安一なりと云  
 禪師采芝順富大和尚の時一持と云  
 此地は秩父街道の驛舎ゆゑ入間郡に属せり三  
 八の日市あり賑はる江戶四谷大本戸あり此所近ハ西の方七里  
 ありあり  
 河越へ四里青梅へ  
 五里ありとのみ

田園雜記  
 〇〇〇〇海と〇〇〇〇石へ移覽よまう〇〇〇〇〇〇福也



所澤卯花



遊石山新光寺

觀音院と号は同所西の方驛舎の入口河原宿と云ふ

地ありて新儀の真言宗中々成木の安樂寺は属を本多正觀音の

立像一尺餘ありて行基大士の作と云ふ相傳建久年間頼朝卿下

野那須野及び三原は狩りもひし時假らむし假家の跡の地を

當寺は本多の附せし地其後星霜を経て兵乱の砌其

地を他不掠とせられり元弘年間新田義貞公北条高時征

罰の頃當寺に至り本尊は祈願を籠られし後鎌倉より攻入り

高時を亡し多し一は靈像の加護なりしをあるて貴み凱哥

の後前よ掠られり六石の地を再び寄附ありしあり連綿

此の所の所澤卯花の道真准后  
 撫前より福泉と云ふ山伏ありて此の地を  
 今廢しり此の地の畑の  
 字に残りて福泉塚と号するものも多し  
 今ハ其名を考ふる人  
 よれはなりしを考ふる



所澤  
薬王寺



田園雑記

とこのはとてとて  
おぼろよまうりる  
小福泉と云山伏  
観音寺とてとて  
とととてとてとて  
小嘉瀬とてとて  
とてとてとてとて  
とてとてとて

野抄ひの  
とてとてとて  
とてとてとて  
とてとてとて  
とてとてとて  
道真准后





中黒の紋を描画ありと云  
 道典准後の四國雜記に所澤の  
 觀音寺ありてさくらえとありて  
 ありて當寺に什宝は新田家寄附の鞍あり黒漆を以て塗るる事  
 ありと云

東光山藥王寺 自昌院と号を同所北の横小路を入り裏通る道  
 あり向ふ側より曹洞派の禪宗中々糸村の永源寺に屬せ  
 中興開山の峯山 藥師堂の本尊藥師如來を座像三尺計に行基  
 大辨和尚と号 臺座ハ金の針金を以て造り極めく妙  
 大士彫造せる所なることあり  
 宝龕を間 相傳ふ元弘の頃新田武藏守義宗公教度の合戦と  
 企むことども家運衰へ軍毎に敗走して家子郎等教多戦死を  
 依て義宗公此地に至る一字の藥師堂に入て假時僧とありて  
 忍びて年月を送るもひくくも時運再びひくくも期をたて歎  
 終に發心して此所を草庵を結び善く護持せる所の佛鉢を  
 以藥師堂の中なるの胎中を籠め法華經千部書寫し修り

戸田  
 羽黒靈泉

標の木の  
 間控より  
 靈泉涌  
 出を諸人  
 これを汲得  
 て病あり  
 者も服飲  
 驗ありと  
 て近頃を  
 本草綱目  
 救天河と  
 ありて釋名  
 と上池と  
 ありとあり







戸田川渡口  
羽黒権現宮

水源八間川中下  
枝を不登生一  
流ハ荒川ともいひ  
隅田川ともいひ  
及舟やとあり  
此川水増志村を  
川ひよを渡すに  
依其項ハ堤傍に  
子我住廻り江  
所ハ昔ハ堤村  
中馬をとりあり  
今も出水の時ハ此  
村中を流る





燒米坂

此地は燒米と名づく家あり故に名本名ハ浦和坂あり



應永二十年癸巳三月朔日壽齡九十一歳なりて逝去ありしと云

則當寺に開基なり自性院義英源宗庵主と号し昔ハ藥師堂のあり在しと云を知らざりとなり寛永の頃ありしと云の蘭若と藥王の二字と寺号とをとり

長誓山妙顯寺 戸田の渡口より二十町ありを隔て西の方新

曾村あり 戸田の羽黒権現 日蓮宗の本寺なり弘安三年庚辰

當國新倉の領主隅田五郎時光とのみ人開基を 寺記に云時光ハ

新倉に住む弘安二年甲州身延山に至り日蓮上人を謁し祝髪し 開山ハ六光

名を日蓮とありしと云中二年己丑十二月三日寂を當寺第三世と稱し 宗祖上人の旨を任せ當寺の兩

僧弟四位民部阿闍梨日向上人なり 山とありしと云和三年甲寅九月三日

總州法花谷の草堂より 於てハ辰世壽六十一

本堂日蓮上人の像を安置せし 中老僧日法上人の作なり世に子安日蓮

所影あり 上人と稱せり等身ありて物腰を掛け

釋迦牟尼佛堂 本堂より左の方あり本堂より廊を備く世に子安釋迦

所の念持佛なりと云文永八年其妻難産を愁し頃時光の夢より 靈像なり

告て日蓮上人の妙符を乞はり安産ありしと云靈像なり



寶藏

釋迦堂の後池の中島あり當寺第一の靈室

開山塔

本堂の左あり日向上人及び開基陽田五郎時光四世日賢尊師の石塔也其並びあり何れも當寺三十三世の住侶日統師建立す所あり

寺寶子安大曼陀羅

宗祖上人の真筆なり此曼陀羅の如護あり

慈眼大師消息

身延山三十一世日蓮上人、墨田五郎時光按證

法華經開結

時光宗祖上人の初念をも自の室の難産をのり利益舟依る、

鬼子母神影

日賢上人常子鬼子母神と名信十三歳の年法苑首題の

宗祖上人真骨舍利

開山日向上人身延より須く當寺に收む

日向上人の

日蓮上人画像 土佐光信 法華經一卷

寺記曰文永八年辛未日蓮上人官府の余により法の為に佐渡

鳴子詣せられぬその年十月十日上人相州とゆ武州糸川に宿し翌十一日新倉に至る時新倉の城主墨田五郎時光

其室の難産なるを上人は告ぐ救苦の祈念を需む上人是を

路傍の叢祠に坐を備け邊に清泉を汲く硯水と曼陀羅及び安産の符を書たし是を授く曰く信心深く人必安産

なりん又是所の兒も男子なるべし長あるの後ハ報恩の爲免

出家せしめしを承りて此地を立退り其日時を隔てて安産

大士は曰ふ処符節を合せたるが如きを奇とし其兒を徳丸と号く

其時の曼陀羅今猶傳へて當寺の什宝なり又安産の時光是より宗教を

大願を發起も同十一年甲戌上人鎌倉の赦免を得り後身

延山に隱栖あり一弘安二年己卯時光其子徳丸を具し

又祝髪して日徳と号

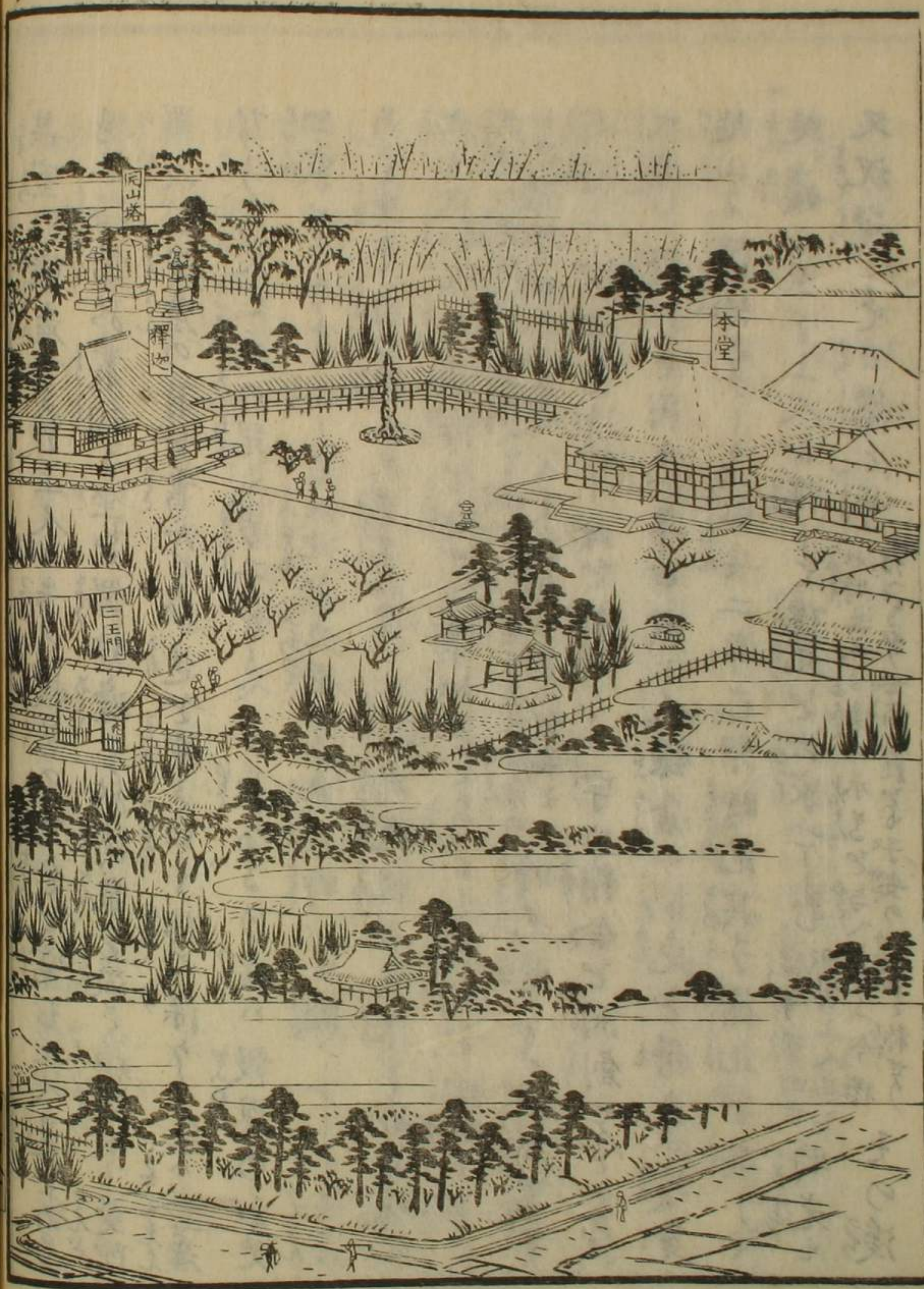
此時上人の慧の本を子安の教と稱せり

其室の難産なるを上人は告ぐ救苦の祈念を需む上人是を路傍の叢祠に坐を備け邊に清泉を汲く硯水と曼陀羅及び安産の符を書たし是を授く曰く信心深く人必安産なりん又是所の兒も男子なるべし長あるの後ハ報恩の爲免出家せしめしを承りて此地を立退り其日時を隔てて安産大士は曰ふ処符節を合せたるが如きを奇とし其兒を徳丸と号く其時の曼陀羅今猶傳へて當寺の什宝なり又安産の時光是より宗教を大願を發起も同十一年甲戌上人鎌倉の赦免を得り後身延山に隱栖あり一弘安二年己卯時光其子徳丸を具し又祝髪して日徳と号



妙顯寺

子安の釋迦如来  
子安の曼陀  
子安の當寺  
子安の置す  
子安の産の妙  
子安の符を以て





弘安三年庚辰に至り竟り志願の如く當寺を創建を上人日向師とて開山たりし時先自相継ぐ當寺に住せり日徳上人淡川左衛門佐義行居城田趾 蕨の驛舎の邊ありてありとて

今其地をさうりたり

鎌倉大草紙曰長祿元年六月廿三日淡川左衛門佐義鏡を大将として武蔵國を指し下野ハ公方の迎親あり九州探題の家なれば諸家も重きよりありひりりへ祖父たつて佐義行ハ久しく武蔵の國司あり足立郡に蕨といふ所を取立居城せり今に至る此所を知れり此の傍に仁可然といふ義鏡を探題管領といふ下知と通し武州上州の兵とも申聞せ成氏を退治し上杉を

調神社 浦和の驛より三町計此方岸村と云ふあり社ハ街道より

右に立せあり今世は月讀宮二十三夜と稱せり別當ハ月山寺と号しと浦和町の玉蔵院より兼帶を新義真言宗例祭ハ九月

廿日なり社の向拜は掲る調神社の額ハ松平信定朝臣の筆跡なり

祭神月讀命一坐本地勢至菩薩 此本地佛はありて

延喜式神名記曰 武蔵國足立郡調神社云云 武蔵國風土記曰 足立郡大調郷調神社神田六

十東二字田雅日本根子彦大日天皇乙酉三月

社記曰當社ハ崇神天皇の勅願なり後建武三年足利尊氏

凶徒追討の宿願ありたるが靈應むねくは仍く社を造營

あり延元二年二月五日社領の地五箇村を附せり又貞和

觀應の間宮方蜂起を此為に寺社悉く廢亡を依り康曆

二年佐々木近江守源持清當社を經營一至徳二年正月二

箇村の地を附たりとて天正十八年小田原北条家滅亡の

時の戦ひの神寶も共散失し神領も又自ら廢せり然るに

御入國の頃悉くも 神祖 當社の由来を聞しめて改て美田山林等を封せ

らる竟り慶安二年朱章を下し賜ふ

子安清水 同所長光山妙典寺にある所の池を以早魁の洞

とぞとの相傳ふ日蓮大士此池水を以りて安産の符を書

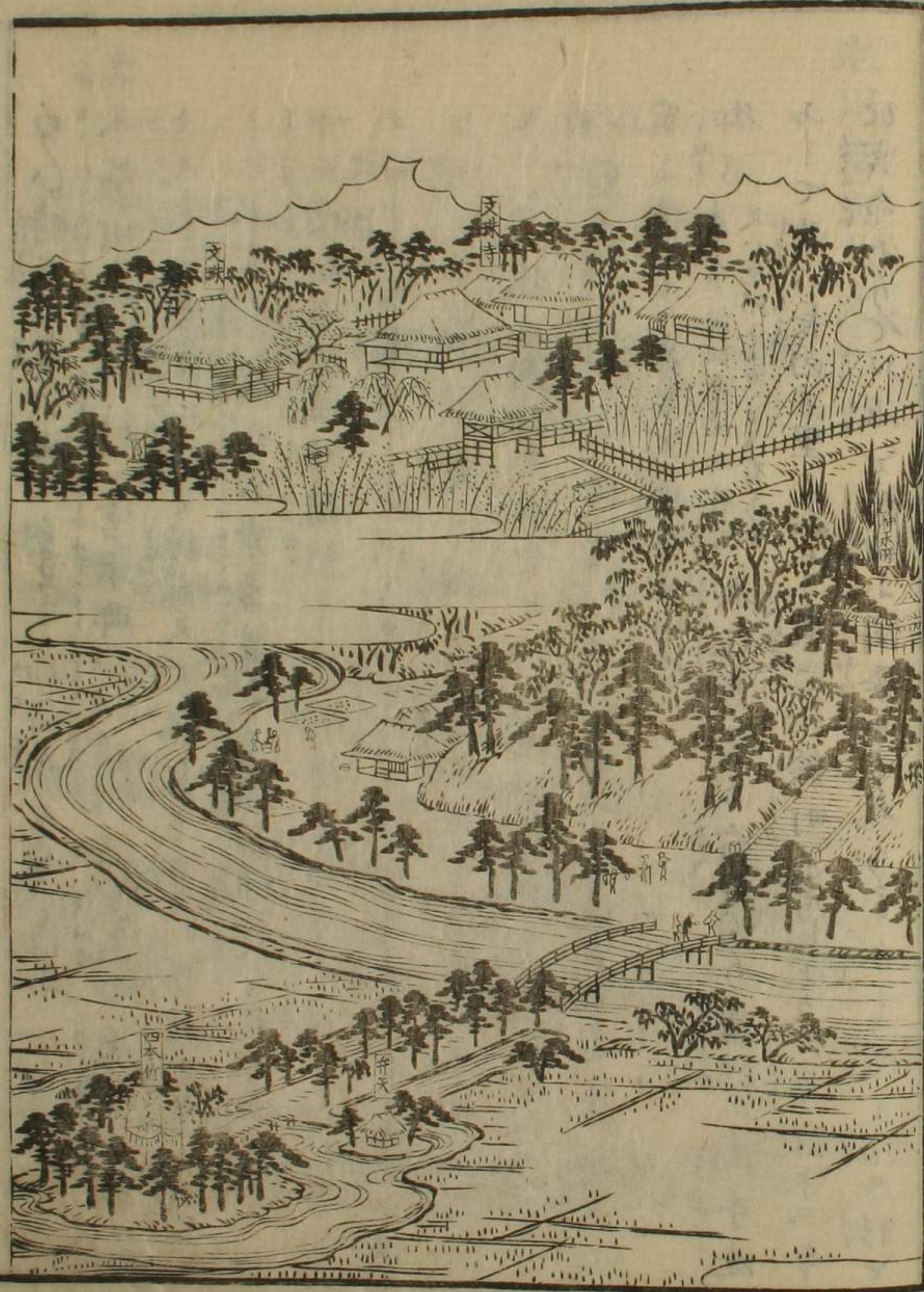




調神社  
 延喜式内の  
 神社あり今  
 誤り月讀  
 廿三夜と稱  
 一と云







三室村  
元簾河神社







氷川宮大門先

のい時光り妻に與へらまゝ一加持水なりといふ

宮本簸川大明神社 宮本郷 大宮 三室山の南麓少あり

土人宮本の簸川社と称へ又女躰宮と号し祭神大宮同躰

して本宮大己貴命右素盞尊左奇稻田媛命と齋ひ祀る當社山

中枚檜神多く社頭巍然として瑞籬葎滑なり現る鼓の音朝

の祈夕の報賽も一めは山にひびくささく神感の興

と催まらむといふ貴し神主武笠氏世々も派奉祀し社領

五十石と賜ふ國初の頃嘗て 神祖を神主の家に入れたまひ

神領及び神宝等御寄附あらせり古器古文書等神主の

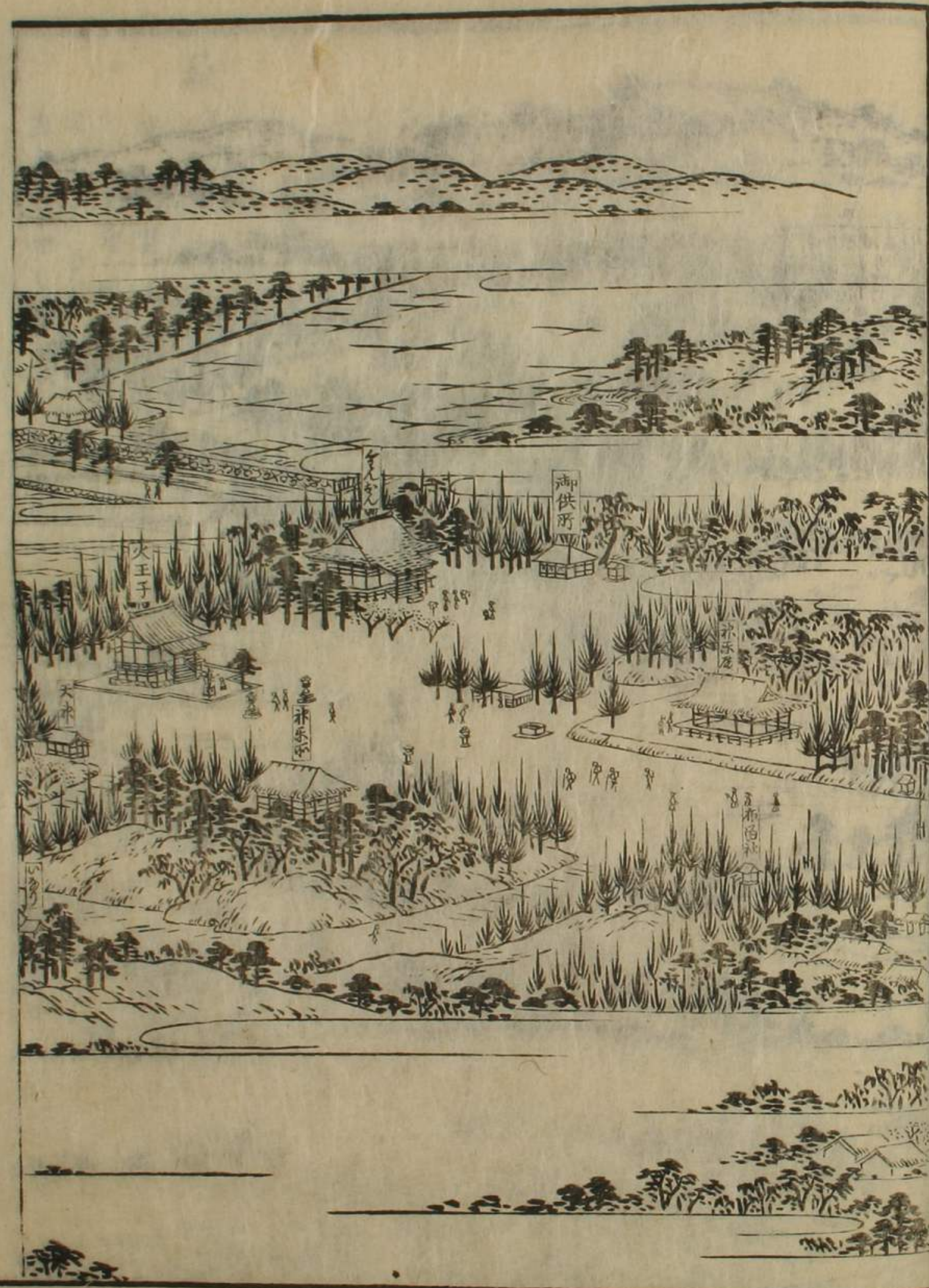
家傳へくまを藏まといふ 本社鳥居の前あり當社の御手洗

御沼 舊事記に水沼小作り 又ハ見沼と書くも有るや 廣二十餘町ありしとや享保十二年

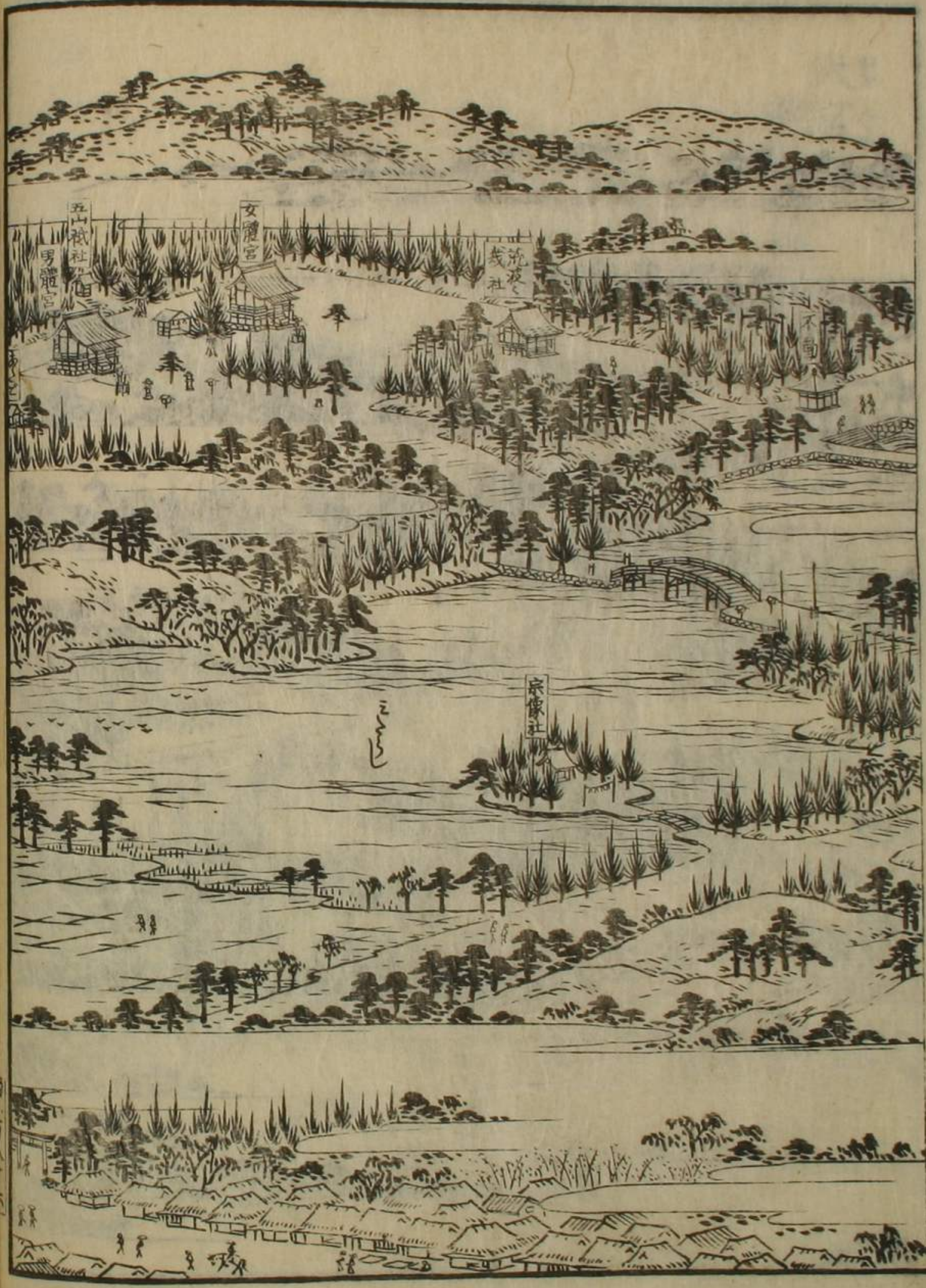
あして昔ハ長四五里を新田小開發せり今も僅小沼の形と

に官命ありて此沼と新田小開發せり今も僅小沼の形と









存も然も猶沼の水中より九月八日大神事なまへ又も十二月

大晦日の夜々々時々々龍燈現もる事ありと云へり

例祭九月八日と六月十四日なり就中九月八日を船祭とて御沼

の中へ神輿と船あて渡り奉る沼の中少く神酒と供もる

儀式あり土代の瓶子今猶神主の家此日神幸の時午前少く北風に

て船あつり沼の中に至る還輿の時ハ必南風も變りて神輿の

船まゝ本の岸に到り着此事振古違ふと云へり

大智山文殊寺大般若堂と號を社地より壹丁程社寶大般若經

一部持統天皇勅り當社納め賜ふ所より昔時東兵乱屢なるも大般若經以轉讀

川原其地今知へり宮本社より大宮の辺と指て云へり

武藏國風土記曰足立郡蘇川原出鮎鰻諸鮮芹菜

右の胡香需早水共為民用云云見也又大宮の南の方道乃

左右三十丁まうりの原と大宮原とも唱ふも若くハ其辺ましく瓜りなな



大宮氷川神社 大宮驛の中 街道の右の方に鳥居立石あり

左の奇稲田媛命 女林の宮と稱す 本宮大己貴尊と齋ひ奉る 蘇王子宮

第一の宮社なる所なり 荒波々幾社 本社傍に在手摩乳足摩乳二神と祀る 武藏國風土記

宗像社 同橋の左の方にあり 祭神田心姫 崇津姫 鹿山社

五山社 本社の後の方にあり 祭神大山神 中山神 鹿山社

本地堂 神池の北にあり 觀音と本尊と 社僧五宇あり 江戸

延喜式 神名帳 曰武藏國足立郡氷川神社名神大

一宮記 曰武藏國足立郡氷川神社素盞烏命云云

神名帳 曰武藏國足立郡氷川神社素盞烏命云云

三征之帳 曰武藏國足立郡氷川神社素盞烏命云云

東 素盞烏尊 大己貴尊 奇稲田比咩 合座也 云云 祭

武藏國風土記 曰武藏國足立郡氷川神社素盞烏命云云

同 書曰安貞三年己丑十一月十日 依去四日 雷電

又於社壇 可轉讀大般若經 之由 被進御使相摸國駿

慕景集 氷川神社奉納の和歌をらまるとりて

老らるる身とて けりてまはるる 白雲 持資

平貞盛願書一通 前太平記 上平貞盛および 舍弟繁盛兼任と共 將門退

一筋の願書にまはるる 寶藏に籠らるる 又其時の神職兵部少輔正範とあり

社記 兵部權大輔富則とまはるる 願書の文を白く

敬白 祈願事 夫以氷川大明神者 本地真慮之

月明 于東方 瑠璃之光明 垂跡 化現 之德 新利 于南

瞻土 濱爰 項年 之間 有平賊 將門 恣取 掠人 州

惱亂 萬民 自稱 親王 私置 諸司 藏如 王道 忽緒 人望 欲

暴惡 莫甚 焉然 愚父 國香 不忍 見彼 積惡 起兵 而欲



鎮山徒自把斧越致一戰之日刺于茲於彼戰場  
殞命今貞盛賊兼任等苟神靈如護之身起一得舉  
居然兵欲誅朝敵報父仇非干戈退四維願者爭一  
勝於心誠玄鑒無誤先令見之瑞驗給仍祈  
願如丹有誠玄鑒無誤先令見之瑞驗給仍祈  
天慶三年正月廿五日  
平貞盛敬白

足利將軍尊氏公御教書

小田原北条家神領寄附之狀

社記曰當社之本朝武運の守護神治國利民の神域と

て鎮坐年舊ぬ二千餘年の星霜和光あま新なり利生徳普

一東方八洲乃蒼生ありく神威以仰々あま以て

世々の武將も崇敬と嚴めて却敵勝利國民安泰の祈誓

と掛たまひし稀なり誠ニ神徳乃日々に新に年々小盛

にましまひし誰人々あまを仰々さんや何乃輩々利物

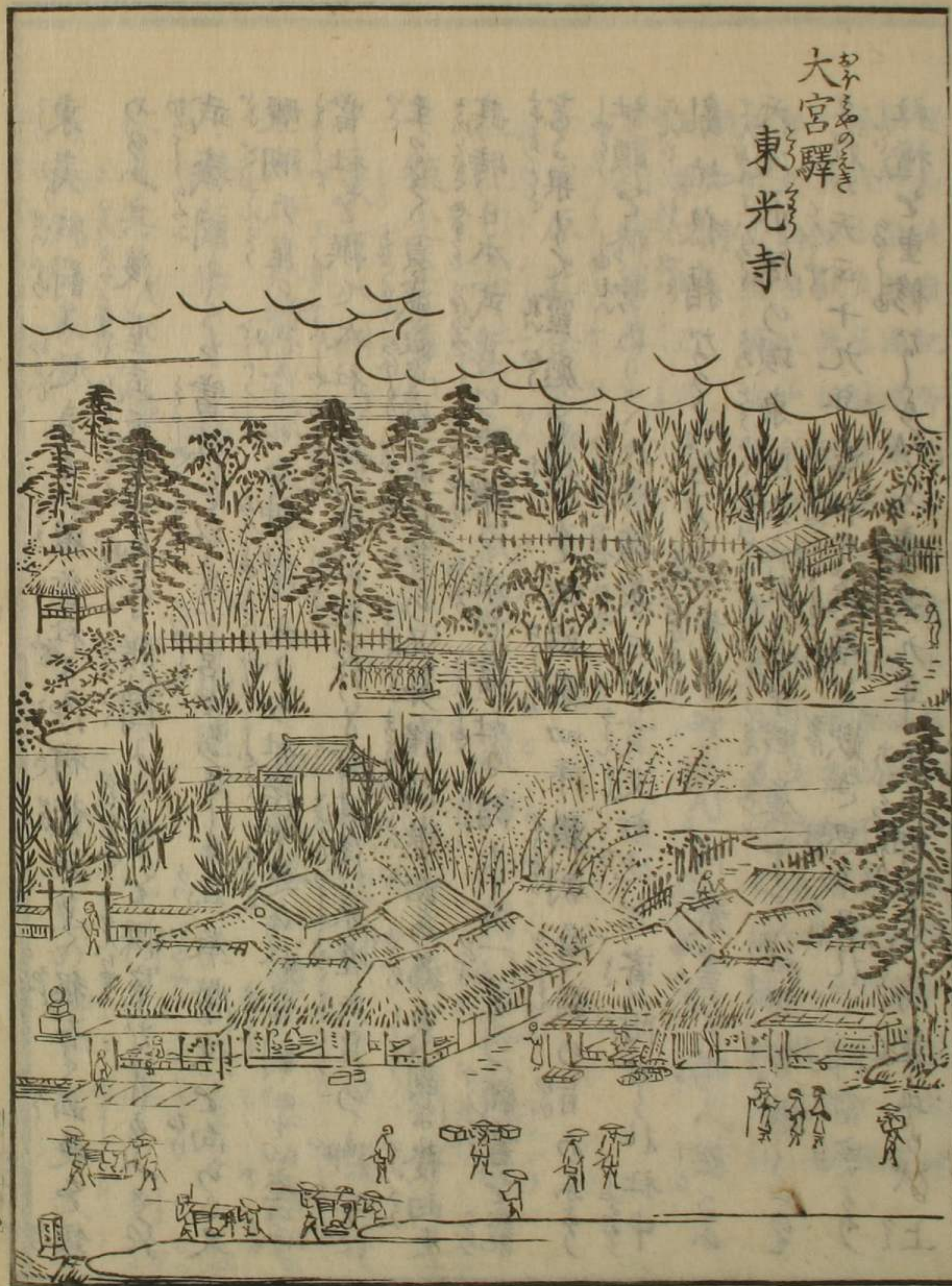
乃和光と蒙らさんやされと 景行天皇の御宇日本武尊

東夷征討趣きあ頃當社より祈誓ありく程あく凶徒を鎮  
めあ其後聖武天皇の御宇諸國一宮と撰定なりあんと  
武蔵國あを當社を以て一宮とあそめ且奉幣使を向り又  
醍醐天皇の御宇あを神社の大小の社格を定り當國四十四座の中  
當社を撰て大社二座の中冠たりむ其後朱雀天皇の御宇に  
至ま貞盛繁盛兼任等の兄弟將門退治の爲東國は發向を  
其時日本武尊の先蹤は准ひ當社に詣り一通の願書と籠  
なる果して靈應を得ると又治承四年頼朝寄願の旨あふより  
社頭を修営ありく大宮領永三貫文の地を寄附せられ社中  
亂妃狼藉なつべきが爲制札ゆび祈教書を賜ふ然るも  
天文永祿の頃東國大は乱れ争戰屢あり社頭荒蕪しを  
これバ天文十九年當社の荒廢を歎き思ひ召れ御當家より  
社檀を重修なり又慶長九年足立郡より高鼻ゆび上





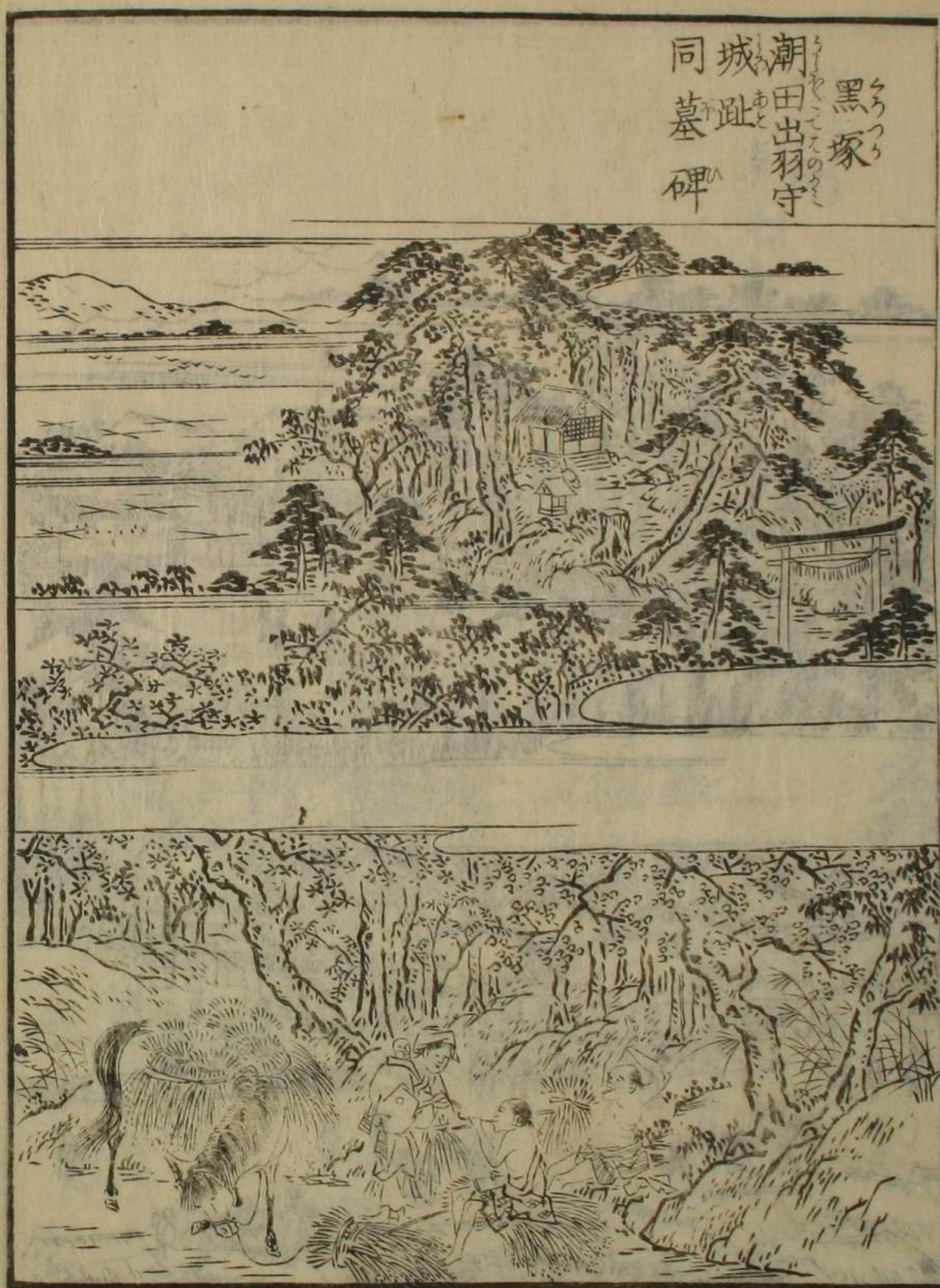
大宮驛 おみやのき  
東光寺 とうこうじ







黒塚  
潮田出羽守  
城跡  
同墓  
碑





落合等の地と合せし社領に寄附なりし朱章の明奉を下

され官造の宮社に列せしむ

大宮山東光禪寺 同所大宮宿宮町の右側より往古天台宗

なるが今宗風を轉し曹洞派の禪林とす 赤谷の常泉 寺に属す 本寺なり

金銅の薬師如来一寸八分ありし木佛の薬師の胎中に収む

開山紀州熊野那智山の東光坊阿闍梨祐慶なり 長寛元年 癸未二月

廿八日辻化傳開天台宗東光坊阿闍梨宿慶法印熊野那智山下濱宮住侶西家三

男之蓋足立郡者光明房依為代代之且那所令下向此時大宮黒塚之悪鬼以法力

令退散云云寺説云云祐慶ハ西家の三男中一那智山下濱宮と云ふ住侶なり長徳

年中西三条の家より継ぎて濱宮の西殿と申候今猶あるを就中西の家ハ熊野

上徑の正嫡 鳥羽院の御宇開東より下向し法力を以て一字と記しき

て熊野の威光と開東より耀しける意ふりし寺を東光寺と号し

足立原より古塚ありし黒塚と号く塚に悪鬼あり窟を宅とす

殺氣天と凌猛威人と排む慶師道力を勵しこれを伏せし

黒塚 大宮驛水川社より四町あり東の方森の中より 此塚より南の方百歩

往古東光坊阿闍梨祐慶悪鬼退

治の地なり昔ハ足立原と唱ふ世俗奥州の安達が原と云ふを誤

なり 奥州の黒塚ハ二本松と云ふ 此所も奥州への海道をれば混交へ

ありしなるなり 足立原の黒塚を武蔵國と云ふハ 総州那智山の記にも見えり

潮田出羽守源資忠之墓 同良の方十町を隔り 資忠の城趾に 五六丁四方の

資忠ハ足立郡大宮壽能城主なり其先清和天皇九代

後胤後三位右京大夫兼兵庫頭頼政十九世の嫡流太田美濃守

三樂齋資正弟四の男也天正十八年庚寅四月十八日相州小田原

より討死を因り其家臣北澤宮内なる者恩寵餘澤の深

思ひ私よこのところ小塚を営む元文三年戊午資忠六世の嫡孫

潮田氏資方再び北澤某よ命して墓碑を造らしむるの旨其

碑銘よ詳なり



江戸名所圖會天権之卷

終畢

Handwritten text in vertical columns, likely a list of names or descriptions related to the title. The text is dense and difficult to read due to the cursive style and fading.



